
永遠の戦い《Eternal War》

有為

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

永遠の戦い《Eternal War》

【Nコード】

N0530J

【作者名】

有為

【あらすじ】

世界には複数の魔王が君臨し、人々は恐怖していた。人類の絶滅の危機に、世界は大きく動くこととなる。人々は生き残ることが出来るだろうか。

魔法溢れるファンタジー！

ブログ（前書き）

性懲りもなくまた同じ世界について書き始めました。

今度は週一を目標に投稿していきます。

前回よりはずっと長くなる予定です。

それではどうぞ。

プロローグ

若い男女の石像がある……。

人が訪れなくなつて久しいその部屋は、石壁は風化し、荘厳な造りだったであろう柱は今にも崩れそうな様子である。

そこに立つ、2体の石像。

男の方は、優しげな雰囲気顔立ち、。しかしよく見ると、しっかりとした体つきをした青年の像だった。

対するに、女の像は、鋭い目つきをして、自信に溢れた出で立ちをしている。

どちらも、等身大の像で、まるで本物のような錯覚に陥る。

静まり返った部屋に、不意に足音が響く。

複数の足音が、広い室内に響き渡った。

「ガタッ」

何十年、あるいは何百年と開かれることのなかった部屋の扉が、「ギィ」と嫌な音を立てて開く。

「ここが、最後の部屋か」

やって来たのは、冒険者らしき出で立ちをした、五人の男女。最初に入って来た、ロングソードを腰にさした男が、感慨深げに呟いた。

彼らは、長い戦いを経て、ここにたどり着いたのだろう。身に纏う衣服は擦り切れ、表情には疲労が見え隠れしていた。

それでも、ここまで来た目的を果たそうと、しっかりした足取りで、部屋の奥を目指す。

弓を持った別の男が、部屋の奥を指差して言う。

「あれ……、あの石像じゃない？」

冒険者達は慎重に、石像に近付く。

盗賊シーフの恰好をした者が、畏がないか確認する。

「……大丈夫だ」

その言葉を聞き、長いロッドを持った女が、像を見据え、呪文を唱えようとする。

「待つてくれないかな？」

唐突に、冒険者以外の誰かの声がした。

突然のことに、魔法使いは喉まで出かかった呪文を飲み込んだ。

辺りを見渡す魔法使いの視界に、石像が動くのが映った。

先程まで微動だにしなかった石像は、いま、ゆつくりと、冒険者達の方へ歩いて来ている。

冒険者達は、直ぐさま身構えた。

ゆつくりと、女の像の口が開く。

「……安心しなさい。君達に害を加えようという訳じゃない。ただ、少し、私達の話聞いて欲しいだけ。遠い昔、まだ世界が暗闇に覆われていた頃、地には魔獣の雄叫びが、天には人の歎き悲しむ声が木霊していた頃の、ある少年少女のお話を……」

一章・結成『レジスタンス』

いつの時代も、世に魔獣が絶えたことはなかった。

魔獣はどこからともなく沸いて来る。魔獣は親を必要とせず、従って種の絶滅というのは起こり得ない。対するに人間というのは、男女が揃って、初めて子孫を残すことができる。

遙か昔から、人と魔獣は争いを続けてきた。魔獣を討伐する人のことを、^{サプレサー}討伐する者といい、個人、或いはパーティーで、世に蔓延る魔獣を討伐している。しかし魔獣もただやられている訳じゃない。魔獣は人を襲うし、農作物を荒らしたりもする。

さらに厄介なのは、魔王と呼ばれる頭のいい魔獣で、奴らは城を建てたりして、広い地域を荒らしたりする。いつの時代も、一、二匹は魔王がいるものなのだが、いつのまにか、5匹もの、強大な魔王が、人類を脅かすようになっていた。その中でも、人々は必死に戦い続けている。人の敗北は、人類の絶滅を意味しているのだ。おいそれと負ける訳にはいかない。

しかしこの頃は、特に情勢が悪い。次々と村が襲われ、人々は恐怖と共に暮らしている。より強いサプレサーが必要となり、サプレサーになるうとする者が増えた。

僕もその一人、幼い頃から剣を握り、必死で魔法を学んだ者の一人だった。

僕の名前は、ラルク、平均的な身長で、中肉中背、およそサプレサーらしからぬ体型だった。髪も瞳も黒で、周りの人間が皆明るい色だったので、少し浮いてる感じだった。

13才になった僕は、サプレサーになるため、当時は国内最大規模だった、テレストス戦闘訓練学院に入学した。

そこで僕が二年生になったとき、事件は起こった。

「おはよー、ラルク」

いつものように、リュウが声を掛けてきた。リュウは僕よりも一回り小さくて、人懐っこい丸顔の少年だ。白っぽい髪をもち、それを短く切っていた。

「ところでラルク、休暇中の宿題は終わった？」

僕は春休みの間に終わらせた宿題の重みを確かめ、「終わった」と答えた。

「流石ラルク。はやいなー」

リュウはそう言ったが、提出日までに終わらせるのは当然であり、別に早くもなんともない。僕が「リュウはまだなの？」と聞くと、「もちろんまだだよ」と即答された。

二年生になって、クラス替えがあったが僕とリュウは一緒のクラスのままだった。

二年生になったからといって、特に何か変わる訳でもなく、授業はいつも通り進んだ。

放課後、僕とリュウはその他数人の仲間と共に、雑談に興じていた。

「そろそろ帰るか」

流石にこれ以上グダグダしている訳にもいかないと思い、僕が提案すると、みんなゆっくりと帰る用意を始めた。

誰もいなくなった廊下に、僕達の足音だけが響いていた。どうやら僕達は結構長く話し込んでいたらしい。どの教室にも誰も居なかった。

ふと、辺りの空気が一気に重くなった気がした。同時に、僕達の前の方から、一人の人が歩いてきた。真っ黒なスーツに身を包み、重々しい足取りで歩いてきた何者かは、まるで僕達などそこにいないかのように、目もくれずに歩き去っていった。

あまりに暗い雰囲気、僕達はしばし言葉を失っていた。

その人が見えなくなると、始めて僕は口を開いた。

「誰、あの人……」

友達の一人が、声を低くして教えてくれた。

「教頭だよ、うちの学校の」

その後も会話は弾まず、僕達は静かに下校した。

時が経ち、夏になった。

2階の教室にも大分慣れ、クラスのみんなと仲良くなった頃、事件は起こった。

5時間目、昼食を食べて睡魔の力が一段と増し、生徒達の意識が次々と別世界へ旅立ってゆく時間、唐突に、サイレン音が鳴り響いた。突然のことに、誰もが意識を取り戻した。

「地下1階より、魔獣が複数侵入しました。生徒は、至急避難して下さい。繰り返します……」

途端に教室は大騒ぎになった。

「どうしよう、私の妹大丈夫かな？」

「やばい、こんなところで実戦なんて御免だよお」

この名門のテレストス戦闘訓練学院は、その鉄壁の守りで、未だかつて魔獣に侵入を許したことはなかった。生徒はもちろん、教師の心中も穏やかではなかった。

「静かに……！」

僕達のクラスでさっきまで魔獣について教えていた先生は、声の限りに叫んで生徒達を落ち着かせようとしていたが、パニックになった生徒はなかなか静まらなかった。

それでも何とか団体行動が出来るくらいに落ち着いて、避難が開始された。1階に下りるのは危険という事なので、二年生以上のクラスは3階の大ホールに避難した。

学校中の生徒が集まり、ホールはともうるさかった。ホールには数人の先生が残り、他の先生は魔獣と戦いに行った。刻一刻と、ホールの緊張が高まっていった。

どれほど経ったであろうか、ホールに集まった生徒が、緊張によって疲れを見せ始めた頃になっても、ホールには何一つ情報はもた

られなかった。

さらに長い時間が経ち、ホールが沈黙に支配されるようになった。
「逃げろ！」

唐突に、廊下から叫び声が聞こえてきた。

声を追うようにして、ホールに人が駆け込んできた。見ると、火炎魔法の教師が、ボロボロな状態で立っていた。服には無数の傷があり、血が滲んでいた。

「はあ、はあ……、逃げろ、みんな、なるべく遠くに、この学院は、魔獣に占領される。勝ち目は、ない」

誰もが耳を疑った。今まで絶対安全圏にあつたはずの学院が、魔獣に占領される。おそらくこの場にいた人間で、それを信じられた者はいないだろう。

だから、全員の行動が遅れた。

そしてその遅れは致命的だった。

人々が動き出すまえに、ホールに魔獣の咆哮が轟いた。

さっきやって来たばかりの教師の背後に、でかい翼の影が重なった。

咄嗟に振り向いた教師は、直ぐに魔法を放ったが、それはかわされ、魔獣の鋭い爪が振り下ろされた。

ホールに血濺きが舞った。

複数の悲鳴が重なり、瞬く間に混乱が伝染した。

ここでようやく生徒が逃げ始めたが、唯一の逃げ道は窓であつた。魔獣はホールの入口付近で、片端から人を切り裂いていた。血が飛ぶ度に、悲鳴があがった。魔獣と戦おうという者は、教師だけであつた。

ホールに現れた魔獣は、サタンと呼ばれる、魔獣の中でもすこぶる強い敵だった。教師が数人がかりで、何とかサタンを倒した。

ほっとしたのもつかの間、油断した教師の首が飛んだ。いつの間にか、新たに数匹の魔獣がホールに侵入していた。今度は教師の手にも負えなかった。

再びホールが地獄と化した。

人の悲鳴と魔獣の雄叫びが入り乱れた。ホールには血の臭いが立ち込め、人には耐え難いものだった。

「何で……、何でこんなことにっ！」

サプレサーを指しているにも関わらず、このとき僕は何も出来なかった。膝が笑って、その場にしゃがみ込んでしまっていた。幸い、僕はホールの中央付近にいたので、未だ生きていたが、魔獣に引き裂かれるのも時間の問題だった。

ホールに新たな魔獣が現れた。筋肉が付きすぎた、二メートル近い巨体に、異様なほどこっついこん棒、オーガと呼ばれる魔獣だった。

オーガが、10匹以上いた。

もはや悲鳴すら出なかった。

生きた人間の数がどんどん減っていった。

高学年の生徒たち（三・四年生）は、魔法を使って窓から脱出した人もいたようだが、それは全体から見るとあまりにも少なかった。一方的な虐殺は30分近くも続き、その頃にはホールには100を遥かに越える屍が、無惨に転がっていた。

残った人は、もはや数える程しか居なかった。その中で僕が生き残ったのは、幸運としか言いようがなかった。この頃には、僕もある程度落ち着いていて、自分に可能な限りの守りをかけていた。

しかし魔獣との直接対決では、勝ち目はないことは明白だった。

ここにいるのは、高位の魔獣だけだった。とにかく逃げまわっていた僕だったが、それももはや限界だった。ふと殺気を感じて後ろを振り返ると、10メートル程先にいたオーガとバツチリ目が合ってしまった。慌てて目を逸らしたが、どうやら標的にされてしまったようだった。そいつは、ニタリと口を歪めると、僕の方に走ってきた。

足は僕より断然速かった。

僕とオーガとの距離が、あっという間に縮んでいった。

5メートル、3メートル、2メートル、1メートル……。

オーガが振りかぶったこん棒が、凄まじい速度で振り下ろされた。すんでのところで交わしたが、衝撃で尻餅についてしまった。

再びオーガが距離を詰め、僕が起き上がる前に振りかぶった。

駄目だ、死ぬ。

僕が思ったその時、ホールが雷に討たれたかのように光った。あまりに強烈な光に、僕の目は焼けるように痛みだした。目の前にオーガがいるにも関わらず、僕はその場にうずくまることしか出来なかった。

しかしいつまで経っても僕がやられることはなく、時折、魔獣の悲鳴が聞こえてくるだけだった。

いつの間にか人の悲鳴がさっぱり聞こえなくなっていた。

僕が見えない目を必死に開けようとしていると、何者かに襟首を掴まれた。僕の足は地面を見失い、揺さぶられたかと思うと、いきなり投げ出された。そして身体が風を切る感覚と共に、急激な落下を感じた。

ぞっとするほど長い落下だった。落下の途中で僕は悟った。僕は窓から投げ出されたのだった。

一章・結成『レジスタンス』（後書き）

どうだったでしょうか、次の土日のどちらかで更新します（多分）。

二話

三階からとはいえ、目が見えない状態での落下は、とにかく恐ろしかった。

やたらと長く感じた落下は、「ベチャ」という予想外の音に終わった。

衝撃はどろどろした液体によってほとんど吸収されていた。

「痛て……」

僕が呻いていると、僕の服にひんやりしたものが染み込んできた。「つてうわっ、気持ち悪っ」

僕の服に液体が染み込んできて、さらに耳にも入ろうとしてきていたので、慌てて起き上がった。

しばらくそうして立ち尽くしていると、次第に視力が回復してきた。

予想した通り、僕はグラウンドに立っていた。しかし、僕の記憶が正しければ、学院のグラウンドに池などなかったはずだ。

不思議に思っただけを見ると、何故かグラウンドの校舎付近の部分だけがぬかるんでいた。

あらためて自分の身体を観察した。

僕の服は、泥だらけだった。

「うわ……、早く着替えたいな……」

先程まで死にかけていたとは思えないほど暢気なことを考えていると、僕から数メートル離れたところに何かが凄い勢いで落ちてきた。

盛大に泥が跳ね、僕に降り注いだ。

僕はげんなりして、落下してきた物をみやった。

「ゲホッ、ゲホッ、ガハッ……」

落ちてきたのは人だった。

気の毒なことに、頭から突っ込んだので、ものすごく苦しそうだ

った。

これ以上泥を被りたくないの、僕はゆっくりと乾いた地面を目指して歩いた。

よく見ると、僕の他にも泥だらけの状態で乾いた地面を目指して歩いている人が数名いた。中には怪我をしている人も居て、泥が染みて痛そうだった。

ふと僕は自分の友達のことを思い出した。さっきまで自分の命が危険に晒されていたためにすっかり忘れていたが、彼らは無事だろうか。

ホールで響いていたたくさんの悲鳴を思い出した。全体の十分の九はやられたのではないだろうか。そう思うと、涙が込み上げてきた。そして人のことをすっかり忘れていた自分に無性に腹が立ってきた。

自分がここまで薄情な奴だとは思わなかった。しかし、現にいつさっきまで、他の人の命の心配など、全く頭になかった。

しばらくそんなことを考えていたが、考えれば考えるほど悲しくなるだけなので、あまりのことに感覚が麻痺していたのだと無理矢理自分を納得させ、一先ず現実を目を向けることにした。

足を縛れさせながら、何とか乾いたところに到達し、身体に着いた泥を出来るだけ落とした。

他の人も近くにやって来て、一心不乱に泥を落としていた。

誰も口を開かず、時折ホールから聞こえてくる魔獣の悲鳴だけが、グラウンドに響いていた。

窓が割れた音がした。

僕達は一斉にそちらを振り返った。直後、三階のホールの窓から黒い影が飛び出してきた。

それは一直線に僕達の方に飛んで来ると、着地する寸前で全身から黒い触手のようなものをいくつも出し、僕らを捕まえた。

「うわっ！」

「ぎゃっ！」

「うおいつ！」

僕は悲鳴をあげて、訳も分からずもがいたが、その黒い触手がしつかりと僕達を捕まえて離さなかった。

地面に着地したその何者かは、そのまま僕達を引っ張って走りだした。僕は触手に引っ張られながら、必死に口元を押さえていた。……ぐるぐる回る視界に酔いそうだったのだ。

流れる景色の中に、校門が見えた。さらに民家が見え、いつも使っていた商店街が見え、大路が見え、いつの間にか知らないところに入って……。

相当なスピードで走っていたのだろう。周りの風景が目まぐるしく変わっていた。

どのくらいそうしていたのだろうか。とにかく、体はあちこちぶつけるし、吐き気は収まらないし、精神的にもさっきのことを引きずっているしで、最悪な時間だった。

僕は見知らぬ土地で止まった。しかしあまりにひどい旅だったので、しばらくは誰も、口を利くどころか動くことすら出来なかった。

何とか視界が回復したところで、僕達を引っ張って来た謎の人物を見た。そいつは真っ黒な鎧を着て、これまた真っ黒な手袋をはめて、とにかく全身真っ黒で覆っていた。さらに、何となくどんよりとした気配を纏っていて、近づき難いというか、話し掛けずらい雰囲気を出していた。

そいつがふと僕達の方を見た。兜から覗いた顔は、僕が以前学院で見たものだった。

「……教頭先生？」

それは忘れたくても忘れられない、たった一度会っただけなのに僕の記憶にしっかりと残っている人物だった。別に顔が特徴的な訳ではない。しかしその圧倒的な存在感は、僕に忘れることを許さな

かった。

「なんで教頭先生がここに？」

僕は思わずそう聞いていた。

「生徒を守るのは教師の義務だ」

教頭先生はぶっきらぼうにそう答えると、僕達全員を見渡した。

僕達がある程度落ち着くのを待って、教頭先生は僕達全員に話し始めた。

「サタンに追われている可能性が高い。見つかりなくなったら私に着いてこい」

そう言うなり、先生は歩き出した。

先生が向かう先には、ぽつんと小さな小屋のような物が建っていた。周りにはただただ草原が広がるのみ、これではサタンも苦勞無く僕達を見つけることが出来るだろう。

「どうする？」

隣にいた僕と同年代の男の子が聞いてきた。

「どうするもこうするも、着いていくしか無いんじゃない？」

僕の言葉に、彼は「それもそうだな」と言って、先生に着いて行ってしまった。

あまりの切り替えの早さに、一瞬呆氣に取られたが、僕も彼に倣って歩き出すと、それまで躊躇していた人も歩き出した。

しかし小屋はあまりに小さかった。僕達は先生も含めると全部で七人だった。対するにその小屋は、内寸が二×二メートルくらいしかなく、全員入ると満足に座れるかすら怪しいものだった。

どのくらいあの中に居なければならぬだろうか、僕が不安に思っていたが、その心配は杞憂に終わった。

先生が小屋の端の方の床を軽く叩き、何か呟くと、叩いたところの床がスライドして、畳の一部と共に壁の中に入っていくと、一人の人がちょうど通れるくらいの穴が開いた。

「全員ここに入れ」

先生はそれだけ言うと、脇に退けて僕達に穴を降りるように促し

た。

「うわ、なんかおつかねえ」さっき話し掛けてきた少年がそう呟きつつ、真っ先に降りていってしまった。

五メートルほど降りると、固い石の床に足が着いた。そこは結構な広さの部屋になっていて、僕達全員が入ってもまだ余裕があった。しかし、

「うわ、何も見えねえ」

明かりがない為に真っ暗で、僕達は声を頼りにお互いの位置を確認するしかなかった。

最後に教頭先生が降りて来て、壁についていたスイッチを押して明かりを点けた。更に別のスイッチを押すと、入口がピツタリ閉まり、僕は何だか閉じ込められた気分になった。

「さて、何から説明しようかな」

先生は面倒くさそうにそれだけ言つと、僕達をゆっくりと見回した。

「取り敢えず俺らをこんなとこに連れて来た理由を知りたいんだけど」

いかにもチャライ感じの格好をした、僕と同じくらいの歳の少年が、ものすごく不機嫌な声で言った。

「魔獣の追撃から逃れる為。それ以上に説明が必要か？」

と、これまた不機嫌な声で先生が返した。

僕達は聞きたいことはたくさんあったのだが、先生の作り出す重い空気に吞まれて、なかなか質問出来ないでいた。しかしそんな空気をものともせず、さっき僕に話し掛けてきた少年が言った。

「じゃ、取り敢えず自己紹介しませんか？」

結局、僕達は自己紹介することになった。

最初は先生からだった。

「私は学院で教頭をやっていた、ドローチル・ヴェンだ。名前は忘れてもらって結構だ。闇と光の魔法で戦っている。以上だ」

何人かは、この人が僕達の学院の教頭だということに驚いている

ようだった。

「じゃあ、次は僕でいいかな？」

続いて遠慮がちに立ち上がったのは、さっき僕に話し掛けてきた少年だった。

「えーと、僕の名前はウィリアムです。ウィルって呼ばれてました。学年は二年です。得意な魔法は風系統の魔法です。よろしくお願いします」

ぺこりとお辞儀をして座った。

「じゃあ次は俺がやる」

そう言っただけで立ち上がったのは、印象的な、真っ赤な髪をもち、耳にはピアスをし、反抗的な目つきをした、いかにも、毎日先生に注意を受けていますといった格好をした少年だった。

「俺の名前はレイモンド、レイって呼んでくれ。戦闘は得意中の得意だから、なんかあったら頼ってくれ。特に炎系統の魔法を使った戦闘が得意だから」

「へえ、それならさっきホールにいた時に力を発揮してくれればよかったのに」

レイとは対比的に、淡い青色の髪を持ち、瞳の色まで真っ青な少女が、挑発するかのように言葉を投げ掛けた。レイはむっとして反論した。

「いくら得意って言ってもサタンやらオーガ相手に勝てる訳ないだろ。まだ俺は二年だぞ」

「へえ、サタンはともかく、オーガの一匹くらい倒しなさいよ。大事などころで役に立たないんじゃないわ、全く頼れないわ」

「そういうお前はどうかだよ。少しでもさっき人の役に立つことしたのかよ」

「私は一匹だけだけど、オーガを倒したわよ。あなたみたいな口先だけの男の子と違ってね。あ、因みに私も二年生よ。名前はセレナ。みんなよろしくね」

「っておい、まだ俺の自己紹介途中だったの」

「いいじゃない、どーせほら吹いているだけじゃない」

「何だと、てめえ喧嘩売ってんのか？」

「あら、今頃気付いたの？鈍いわね」

「てめえ……、勝負しろ。そんだけ大口叩くんなら、それだけの実力を見せてみやがれ」

「いいわよ、ちなみに私の得意魔法は水の系統。武器はお互い持ち合わせていないようだし、魔法戦でいいかしら？」

「構わねえ」

二人はもはや僕達の事を忘れてしまったようで、戦う気満々だった。僕達とはっちりを喰らわないように、静かに壁際まで移動した。どうやら先生も止める気は無いらしい。それどころか、興味津々で、二人がおもいつきり戦えるように、魔法の結界を張っていた。二人は少し距離を置いて向かい合つと、静かに睨み合った。

三話

開始の合図は、さも当たり前のように先生が出した。

「では、試合開始！」

開始と同時に、二人は呪文を唱え出した。

「code：1121a・取り巻く水よ盾となれ」

「code：0334a・熱よ、激しくあれ」

レイが放った熱の波は、放射状に広がり、セレナを襲ったが、セレナの魔法で生じた大量の水でに冷まされてしまった。

熱の本流を冷ましてなお蒸発せずに残った水は、セレナの周りを不規則に回り始めた。僕がその様子を観察している内にも、二人は次の呪文を唱え始めていた。

「code：1204a・水よ、敵を打ち抜け」

「code：0230a・貫け。赤き炎よ」

今度は二人の魔法が一直線に飛んだ。レイの撃った炎は、セレナの周りを回る水にぶつかり、残った水を全て蒸発させた。対するに、守る物の何も無いレイは、魔法の発動とほぼ同時に跳ぶことによって、何とかかわした。しかしそれによって生まれた時間差を、セレナは見逃さなかった。

そこからは一方的な戦いだった。

結局、レイは反撃のタイミングをつかめずに、最後はセレナの発した光の魔法で、がんじがらめにされてしまった。

二人とも二年生とは思えないほど、魔法を上手く使いこなしていた。

「凄いね、二人共、aクラスの魔法だけであそこまで激しく戦う人始めてみたよ」

ウィルが、驚きの声を上げた。

aクラスというのは、魔法のランクの事で、このクラスの魔法は、魔法の中では最も扱い安くその分威力が低い。

魔法を使うときは、魔法を特定する魔法コードというものを最初に唱える。魔法コードは、四桁の数字と、その魔法のランクを表すアルファベット（a、b、c……）からなる。つまり呪文の最初さえ聞けばその魔法について色々分かるようになっていいるのだ。

「くそつ、勝てると思ったのに……」

レイは光の紐にぐるぐる巻きにされながら、セレナを睨み付けていた。

「あら、どこら辺に勝算があつたのかしら？」

「ぐ……」

勝者の言葉に、レイは何も言い返せないようだった。

「あの……、次は私が自己紹介してもいいかな……」

何となくおっとりした感じの少女が、恐る恐るといった感じで口を開いた。

僕達が自己紹介の途中だったことを思い出すと、その少女は自己紹介を始めた。

「えーと……、私の名前はシリアです。好きな食べ物は林檎で、得意な魔法は、光の系統です。学年は私も二年生で……、こんなもので良いでしょうか、よろしくお願いします」

シリアの自己紹介が終わり、残るは僕とあと一人となった。一番最後というのも嫌だったので、僕は立ち上がって自己紹介した。

「僕はラルクです。同じく二年生で、だいたいどの系統の魔法も同じくらい鍛えています。あまり力が無いので軽い武器が得意です。よろしくお願いします」

僕は無難に自己紹介を終え、最後の一人を見た。

先程から全然喋っていなかった無口なその少年は、ゆっくりと立ち上がって、小さい声で自己紹介したのだが、僕は名前しか聞き取れなかった。彼の名前は「ヘイド」と言うらしい。

これで全員が自己紹介を終えた。

僕達は改めて先生を見た。

「……これで全員だな。ではそろそろ落ち着いてきた事だろうし、

状況を説明しよう。今私達がいるのは学院から南に五キロ程離れた所だ。場所は比較的魔獣の被害が少ない所ではあるが、学院が占領された以上、いつ魔獣の手が及ぶかわからない。帰るあてがあるなら帰っても構わないが、今やどこに行っても危険だ。そこで、だ。しばらくここで生活しないか？」

ここで先生は僕達を見回した。僕達はみんな難しい顔をして考えていた。

僕はどうしようか。

この時僕は家に帰る事も出来ただろう。しかし僕の家は決して裕福ではなかった。学院にいる内は、補助金が出ていたし、寮には無料で泊まれた。ここで僕が帰ってしまえば、家のお金は底をつくかも知れない。

僕以外の人も大体僕と同じような状況の人がほとんどだろう。皆悩んではいたものの、家に帰ると言った者はいなかった。

「……全員残るのだな？」

先生の問い掛けに、僕達は躊躇いつつも、頷いた。

地下での暮らしは、思いの外快適だった。魔法が上手な人が多かったせいか、ほとんど不自由の無い暮らしだった。

朝は完璧な体内時計を備えているレイが皆を起こし、朝食は先生が作ったり、シリアが作ったりして、昼は外に遊びに行く事も出来るし、魔法で洗濯も出来るし風呂も沸かせるし、僕達とはにかく充実した日々を送っていた。

もちろん僕はサプレサーの訓練も欠かさなかった。セレナに標的にされるのは御免なので、ずっと黙っているが、僕もレイやセレナとやり合える自信はある。

しかし僕は時々思っのだった。

魔獣に相対したとき、果たして僕は自分の実力を出せるだろうか。

思い出すのは学院が魔獣に襲われたあの日、僕は逃げ回るだけで、戦う余裕など少しもなかった。

セレナはあの中で魔獣と戦ったと言っていた。それなのに、僕は何も出来なかった。

僕は自信を取り戻すためにも、魔法の訓練を続けていた。

ある夏の晴れた日、僕達が地下で生活し始めてから一月が経過した頃、先生がふと僕達に尋ねた。

「おまえ達が普段使っている武器は何だ？」

「俺は槍だな」

レイが真っ先に答えた。

「僕は片手剣です」

答えて、僕はウィルを見た。

「僕はロッドだよ」

「えっ、ウィルって魔法で戦うタイプだったの？風系統の魔法を使うのに？」

セレナが驚くのも無理はなかった。ウィルの得意なのは風の系統の魔法、接近戦の補助に使われる事が多く、武器と併用して使うのが一般的なのである。風系統で魔法のみでの戦闘をする人は、まず居なかった。

「まあ、他の系統も使えない訳じゃないしね。ほら、なんか他の人がやらないような事をやってみたいじゃん。ところでセレナさんは何を使うの？」

「私は色々使っていたからな……、でも一番気に入っていたのはやつぱり細身の剣かしらね……。腕力にはあまり自信ないし……」

「セレナちゃんでも自信無いなんてことあるんだ……」

シリアが小さく呟いた一言に、レイが爆笑した。

「そりゃ私だって……、ただの自信家一緒にしないでよ」

「ご、ごめんなさい。なんか、セレナちゃんなら何でも出来そうだ

「だから……」

「私だつて苦手な物くらいあるわよ。というかレイ、いつまで笑つてるのよ」

「いや、すまん。セレナが自信無いとか、考えてみれば確かに似合わねえ」

「なんかムカツクんだけど……」

「何だか不穏な空気が漂い始めたので、僕は話題を戻すことにした。」

「で、ヘイドとシリアの武器は？」

「僕はナイフとか……」

「私もウィル君と同じでロッドですよ」

「ふむ、ウィルとシリアはどういったタイプのロッドを使うんだ？」

「僕は魔力制御の補助になるやつを使つてましたよ」

「私は魔力精度を上げる物を使つてました」

「そうか……、みんな上手い具合にバラけているな。どうだ、今度全員に武器を買つてやるうか。どうせみんな武器は学院に置いたまま取られたのだろう？」

「え、いいんですか、こんなにいるのに……」

「武器を揃えるのには結構なお金がかかるので、僕は驚いた。」

「構わん。武器があつた方が、外出しやすいだろう？ おまえ達にも働いて貰わない事には私の体が持たないからな」

「やった！ ありがと。せんせ」

「レイがとても喜んで言つた。」

「結局、次の日にすぐに買いに行く事になった。」

「出発前、先生はくどいほど、

「いいか、此処の事は絶対に人にばらすなよ。隠れ家としての役割もあるんだからな」

「と言つて聞かせた。その後は、朝からやたらとハイテンションなレイに半ば引きずられるようにして、僕達は久々に街へと歩き出した。」

途中、先生が「体力をつけろ」と言い出して、僕達は街までのや

たらと長い行程を走る事になった。

知らない土地で、おいてきぼりを食らう訳にはいかなかったので、僕達は必死でついていった。

僕達が行った街は、「ゼルメス」という街で、魔獣の被害が少ないのか、活気に満ち溢れていた。僕達は所狭しと並ぶ店の中から、ちょうど良さそうな武器屋を探していった。

慣れない街の中で、大分うろろした僕達は、たつぷり時間をかけて、最適な武器を探した。

先生にアドバイスを貰いながら、武器を選んでいた僕達は、昼食を挟んで日が傾く頃まで街を歩き回った。

「いやー、楽しかった。なんか人込みを見るのも久しぶりだな。あそここの周りときたら草原と森しか無いんだもの」

レイが伸びをしながら言った。

「ところでさ、またここから走るの？」

ウィルが恐る恐るみんなに聞いた。

「うむ……、走らないと、真夜中に森を抜ける事になるからな。来た時くらいのペースで走らないと……」

先生の言葉に、僕達の動きが完全に止まった。

「武器持って、あのペース……」

流石のセレナも、表情に余裕が無かった。

「先生、本気……、ですか？」

「冗談だ」

この一言で、僕達の半数は崩れ落ちた。

「冗談かよー、心臓に悪いぜ。先生」

「死ぬかと思った……」

僕達は完全に力が抜け切った。一通り安心したところで、僕は質問した。

「でもそれじゃあどうやって帰るんですか？」

「今日は宿に泊まっていくぞ。明日になったら走れるだろう？」

僕達は二つ返事で賛同した。

僕達が泊まった宿は、木造の小さな宿で、殆ど僕達で貸し切り状態になってしまった。僕達は一人部屋に二人入ったりして、何とか宿に収まった。

僕は、ウィルと一緒に部屋で、ゆったりと雑談に興じて、街を歩き回った疲れを癒した。

夕食は、全員集まって、わいわい騒ぎながら食べた。レイがやたらと沢山食べるので、セレナが文句を言っていた。

僕達はすっかり疲れていたので、普段よりもずっと早く寝た。

こういった平和な日々が、いつまでも続けばいいのにと心の底から思ったのは、僕だけではなかっただろう。

四話

僕達は朝起きて、軽い朝食を済ませると、街に買い出しに行った。地下の隠れ家に戻れば、周りには何も無いので、消耗品はなるべく沢山買い溜めしておかなければならなかった。先生からお金を受け取り、買う物を言い渡されて、僕達は街にくりだした。

日用品から、医療品（主にレイとセレナが戦闘して消費している）、そして大量の食料と、全部合わせると結構な重量だった。

大量の荷物を抱えて、人通りの多い道を歩くのは危険なので、僕達は大きな通りを避けて歩いていった。

幸い、治安はかなり良い街なので、危ない目にあうことは無かったが、大きな通りでは見かけなかったような、変わった人達に会った。

最初に見たのは、気温が二十度を越えているのに、フードを被り、マスクをして、だばだばの、真っ黒なコートを被って歩いている人。それも一人では無く、そんな怪しい格好をした人を五人近くも見てしまったものだから、僕達は気分が悪くなった。僕はレイが背負った少し短めの槍に手を掛けているのを見てしまった。

次に見たのは、先程の人達とは対照的に、真っ白な、やたらと裾の長い服を着た人達だった。

「あの服って、一体どんな素材で作っているんだろう？あんなに白い生地って……」

セレナがひそひそ声で疑問を口にした。確かに、聖職者の衣装でさえ、あそこまで白くはない。

「もしかして、鳥の糞を練り上げて作っているんじゃないか」

「どうしてそんな汚い発想しか出来ないのよ」

レイがセレナに殴られていた。

その後も、あの生地は何から出来ているかという事について、十分近くも話していた僕達だったが、正直僕は、生地云々よりも、あ

れを着て歩き回っている人々の神経の方がよっぽど気になった。

少々気味の悪い路地を抜け、普通の人々が通る通りにでると、ちようど買いい物を終えたらしい先生に出会った。

「お、そつちも買いい物を終えたようだな。じゃあ、このまま帰るか」
そんなこんなで、僕達は地下の隠れ家に戻る事になった。

流石に、重い荷物を持つて走るような余裕は、僕達にはなかった。やたらと長い距離を、何時間もかけて歩き、途中適当な場所で食事を済まして、更に歩き、来たときの何倍もの時間をかけて、僕達は帰ってきた。

「やつと着いた」

隠れ家に着くと、レイが荷物を下ろし、大きく伸びをしていた。

僕達は、買つて来た荷物をしかるべき場所に移し、久々に「我が家」で体を休めた。

その日疲れていた僕達は、爆睡し、しかし次の日、相変わらず完璧な体内時計を備えたレイが、すっかりいつも通りの時間に僕達を起こした。

「いやーしかし街は楽しかったね」

ウィルが街で買つて来たソーセージを頬張りながら言った。

「これで武器も手に入ったし、街で買つて来た物もいろいろあるし、しばらく退屈しねえな」

レイが壁に立てかけてある槍を見ながら言った。

「ちよつと、レイ。何で食卓に武器持つて来ているのよ」

「いーじゃん別に。このあと特訓しに行くんだよ。絶対今度はおまえをぶちのめしてやるから、覚悟しとけよ」

「その今度とやらは、私が生きている内に来るのかしら？流石に何十年も待てないわよ？」

「そんなにかかるかよ。一月も有りゃあ十分だ」

「ふーん。ほんの数日前にボコボコにされた奴のものとは思えない台詞ね」

「うるせえ、俺の成長スピードを舐めんなよ」

「口だけじゃなくて、成果で示して欲しいものだわ」

「黙れっ！ラルク、練習に付き合え。飯食ったら外でやるぞ」

いきなり僕に白羽の矢が立った。

「まあ、いいけど……」

結局、僕はレイの練習相手をつとめることになった。

いつもよりやや豪勢な食事を終え、僕は武器を持って外に出た。

何故か他の皆も着いてきて、結局全員が外に集まった。

「あれ、ウィルって、今日は新集めの当番じゃなかったっけ？」

「良いじゃん良いじゃん。僕もラルクの戦う所見てみたいんだもの」

「えっと、もしかして他の人も……？」

「うん、実はこの間、みんなで話していたんだよ。ほら、僕とかヘイドとかはよくレイに相手させられているけど、ラルクだけなんだかんだ言って戦って無いじゃん。」

「でもそれならシリアだって……」

「私は補助しか出来ないから……」

「まあ、別にいいだろ？みんないても」

レイが目を輝かせて僕を見ている。何気に彼も僕の実力を見てみたかったらしい。というかそのためにわざわざ僕を誘ったのかも知れない。

「まあ、別にいいんだけど……」

でも本当は、セレナに目を付けられそうで嫌だな……。とか思っていた。

「よし、じゃあ一発、勝負しようじゃないか。実力見るには勝負するのが一番だしな」

いつの間にか、レイの訓練から、僕の実力審査に変わっていた。いきなり実戦形式ですか。……仕方ないか」

僕は覚悟を決めると、適当な距離をおいてレイに向き合った。

レイは準備体操をしていた。僕は軽く肩を回し、まだしっかり馴染んでいない剣の握りを確かめつつ、戦略を練った。

「では、二人共、準備はいいか？」

当然のように、先生が審判についた。僕らが頷くと、先生は何か呟いて、軽く手を振った。同時に、大きな光の円が地面に描かれ、そこから光の壁が飛び出した。

「では、試合開始！」

先生の合図と共に、僕達は呪文を唱え始めた。

「code：0334a・熱よ、激しくあれ」

「code：1121a・取り巻く水よ、盾となれ」

取り敢えず僕は、いつかのセレナと同じことをしてみた。たまたま、レイもセレナと戦ったときと同じ呪文を使ったので、あの時と同じ状況が生まれた。かに見えたが、それでも無かった。

僕が身に纏った水の守りは、レイの放った熱の波に触れるや否や、全て蒸発してしまった。セレナの魔法の威力が凄かったのか、レイがあれから成長したのか、どちらが原因なのかは定かではないが、ともかく、この撃ち合いは僕が軽く熱に晒される結果に終わった。

魔法が放たれると直ぐに、レイは走り出していた。

水蒸気で視界の悪かった僕は、槍の間合いの一手手前までレイが迫ってきて初めてレイの接近に気が付いた。

レイの鋭い突きを、剣で弾いて何とか避けた。そのままレイとの間合いを詰めようとしたが、レイが別の呪文を唱えているのに気が付き、逆に間合いをとらざるを得なかった。

レイが再び放った熱の波に対して、僕は目一杯距離をとることでダメージを軽減するしか無かった。

しかもレイが槍で追撃をかけて来るので、火傷に構っている余裕がなかった。

幸い、こちらに聞こえないくらいの小声で唱えられた魔法だったので、威力は低く、そこまでのダメージは無かったが、痛みでいつも通りに動けなかった。

そこからは、レイは呪文を唱えるのをやめ、槍での攻撃に集中してきた。

僕は小さい頃からずっと繰り返してきた動きをなぞり、槍をかわ

したり、払ったりしながら剣の間合いまで詰めようと試みた。しかしやはり身体が思うように動かなかった。このまま打ち合いを続けられ、後数合の内にやられてしまうだろう。そう判断した僕は、距離を詰めるで見せ掛けて、それに併せて一歩後退して槍を奮ったレイから、思いつき後ろに跳んで離れた。

レイが追撃をしようと距離を詰める間に、呪文を唱え始めた。

「code:3021a・大地を揺るがせ」

レイの攻撃をほとんど無意識に防ぎながら、地の属性の中では最も簡単と言われている、ちょっと周りの土を揺さぶるだけの呪文を紡いだ。しかしそれでも、戦いにおいては十分な隙を生みだせる。

レイが地面の揺れに足をとられ、体制を崩した隙に、僕は一気に間合いを詰め、レイの首へと吸い込まれた。

勢い余って刃がレイの首に当たったが、戦いの前に魔法で切れなくしてあるので問題無い。はず。

「よし、試合終了。勝者ラルク」

先生が適当に試合終了を告げた。

「ふう、何とか勝てた」

一気に疲れが押し寄せて、僕はその場に座り込んだ。

「お疲れー」

ウィルが救急箱を持って歩いてきた。他のみんなも少し遅れて着いてきた。

「まさかラルクが勝なんて、正直びっくりだよ。レイも強いのに」
ウィルが救急箱を開きながら言った。

「というか、レイって案外たいしたことないんじゃないの？」

セレナが痛烈な一言を浴びせるも、レイが反応する様子は無かった。

どうしたのかと思ってレイの方を見ると、レイは本気で落ち込んでいた。

「ラルクにも負けた……、セレナにも負けて……、俺って弱い……」

何だか相当落ち込んでいる様なので、取り敢えずそつとしておくことにした。というか、僕ってそんなに弱そうだったのだろうか。セレナに負けたときは悔しがってはいたが、そんなに落ち込んではいなかった気がする。

「ラルクとセレナさんが戦ったらどうなるんだろう」

突然、ウィルが余計なことを言ってくれた。

「そんなの私が勝つに決まってるじゃない。レイ相手にあんなに苦戦しているようじゃ、私の相手じゃないわよ。まあ、今度戦ってみるのも悪くはないわね。ラルク、回復したら、今度は私とやるわよ」
なんだかんだ言って、僕と戦う気満々らしい。僕に拒否権は無いようだった。

「ふむ、なかなか、戦い好きな奴が多いのだな。流石学院の生徒だ

……」

「いや、先生、それは二人だけです」

ウィルのツツコミを、軽く受け流した先生は、この後とんでもないことを言い出した。

「おまえ達、魔王を倒してみないか？」

「へ？」

一瞬、空気が固まった。

「先生、何の冗談ですか」

いち早く現世に復帰したウィルが、恐る恐る尋ねた。

魔王は、よほど訓練を積んだサプレサーでないと、倒すのは難しい。普通の人が大人数で魔王の城に押し寄せても、逆に目立ってしまっただけから魔法で殲滅されてしまう。なので少数精鋭で挑むしかないのだが、それは普通、所謂天才が、かなりの経験を積んで挑むのであって、大多数のサプレサーは、せいぜい、魔王の勢力を削るだけなのである。勿論、僕達だって、いずれは魔王を倒したいとか思ったりはしていたけれども、そんなに軽々しく出来ることではないのは、誰だって分かっていたはずだ。

しかし先生は自信たっぷりに言った。

「安心しろ、何も今すぐという訳ではない。しばらくは私がおまえ達を訓練してやる。その後で、時期を見て、私と共に魔王を潰しに行こうではないか」

「そんな簡単にいくものですか……」

ウィルが心配そうに言った。他のみんなも、先生がおかしくなったのでは無いかと訝しんでいた。

「大丈夫だ。私はこう見えてかなり強いぞ。多分一対一ならたいいの魔王には勝てる。おまえ達はそこまでの道を作ればよい」

「それなら少しは手伝えるかもしれないわね……」

セレナがぼつりと呟いた。

「俺はやるぞ。先生に稽古つけて貰えるんなら。どのみちサプレサーとしても、魔王に戦いを挑まねえんじゃ、意味がねえ」

「ふむ、強制はしないが、出来るなら参加して欲しい。このままでは、魔王の勢力が膨らむだけだ」

「なら僕もやります」

ウィルが名乗りでた。

「……私もやるわ」

続いてセレナが参加を決めた。それに続いて、僕も参加を決め、レイが改めて参加を宣言した。

「ヘイドとシリアさんはどうするの？」

ウィルが聞くと、二人は少し間を置いて、しかし首を横に振った。「私はみんなみたいに戦えないし……、それに、この前学院で襲われたとき、私は心底怖くて……、正直、サプレサーには向いていないんじゃないかって……」

あの日のことを思い出したのか、シリアは震えながらそう言った。「僕は……戦えない。……ごめん。でも、もう戦えそうにない」

ヘイドは小さく呟いた。僕達は学院での悲惨な光景を思い出して、しばらく沈黙が続いたが、やがて先生が、

「まあ、無理しなくてもいいさ。取り敢えず四人いれば戦える。二人共気が変わったらいつでも言ってくれ。とにかく、四人は今日か

ら特訓していくぞ」

といって、場の空気をかき消した。

「先生、その前に名前を決めませんか。僕達のチームの名前を」
ウィルがいきなりそんなことを言い出した。

「ふむ、構わんが……、何がいい？」

「じゃあ『レジスタンス・フォース《抵抗勢力》』でどうでしょう」

ウィルの提案に、セレナが「長すぎる」と文句を言い、結局、僕達の組織名は、「レジスタンス」だけになった。

四話（後書き）

何とか更新できました……

親に隠れながら書く破目になっているのでいつストックが切れるか

……

更新できなかったらすみません。

間章（前書き）

一章は前話で終わりました。

間章

「暗黒時代か……」

ひんやりとした石の床にどっかりと腰をおろした、いかつい顔をした冒険者の男が、腰に挿したロングソードをいじくりながら呟いた。

「五人もの魔王が一つの時代にいたなんて……、想像もつかないわね」

男の向かい側に座って、ずっと無表情のまま話を聞いていた魔法使いの女は、わずかに顔をしかめて言った。

「どういう訳か、石像となってしまっている男——ラルクと言うのだらう——」の話聞き、冒険者達は、今の自分たちの時代について思いを巡らせた。

世界を支配しようと企む二匹の魔王。それでさえも、彼ら人間にとっては十分な脅威だった。その二倍以上の数の魔王、それが一つの時代に君臨した時、どれほどの被害が出るのだろうか。

冒険者達の心中を察したのか、女性の方の石像は、その色の無くなってしまう唇を開く。

「私達のいたところは、この時はまだそれほど酷くもなかった。森に入っても魔獣に出くわすこともほとんどなかったし、近くの街が魔獣に襲われることもなかった。でも、他の地域はそうじゃなかった。私達が通っていた学院の周りなんて、ほんとに街なかで、魔獣

の侵略とは最も縁がない街だと思われていたのに、それでもあんなことが起こってしまった。絶対安全な場所なんて、それこそどこにもなかったわ……」

「学院は……、あの事件の後、学院の周りはどうなったんだ？」

剣士の男が聞いた。

今度は男の像——ラルクが答えた。

「あの後は、それは酷かったらしい。学院を拠点とした魔獣達が、そのまま街を攻撃して、結局、グルセントス——学院のあった街の名前だけ——はそのまま占領されてしまった。何とか隣町への侵攻は食い止めたらしいけど、そのあともしわと勢力を拡大していつて、僕達がレジスタンスを結成した頃には、周りの街もほとんどが落とされていた。学院の周りだけじゃない。あちこちで、学院みたいな、予想外な所からの襲撃を受けて、次々と人の治める街が占領されていった。その余波は、やがて僕達の隠れ家の近くまで訪れたんだ………」

間章（後書き）

次は第二章『ラルクは何所？』になります。なるはずです。

二章・ラルクは何所？（前書き）

ここにきて視点変更です。

二章・ラルクは何所？

さて、ここからは私が語りましょう。

私の名前はセレナ。髪は……ラルクは淡い青色と表現したけど、水色だよ。いや……、どっちでもいいか。で、瞳も青色で、少し長めの髪型にしているわ。

私は昔から、自分の才能を信じて疑わなかった。だって、サプレサーの勉強だって、ちよつと頑張っただけでトップになったし、スポーツも、何も練習しなくても、素人同士なら、まず負けなかった。サプレサーとしての戦闘なんて、同年代の奴に負けたことなんてなかった。

だから、自分はいわゆる天才なんだと、信じて疑わなかった。自信過剰だつて言われることもあったけど、仕方ないじゃない。

実際、学院での事件の時、私は先生の一人と協力して、オーガを倒した。そして何とか最後まで生き残り、教頭に助けられた。

この時私は教頭の異常な強さを目の当たりにした。

強烈な光を放って現れた教頭は、同時に三体のサタン相手に、一歩も引かずに戦っていた。

更に敵が増えて、分が悪いと見るや、敵を上手く捌きつつ、私達生徒を窓から脱出させた。

私は目が見えていたので、自分から飛び降りたけど、多分あの段階で生きていた人は全員助けられたと思う。

その後どうしてすぐにサタン達が窓から追って来なかったのかはわからないけど、多分教頭が足止めたんだらうと思う。

その後隠れ家に住むことになった私は、戦闘が得意だとか言ってたレイをぼこぼこにし、度々再戦を申し込んでくる彼を返り討ちにして、暇を潰していた。

それでもレイは確かに強かったから、私はいつも本気で戦っていた。

だから、レイがラルクと戦うと言ったとき、私は当然レイが勝つものと思っていた。

ところが結果は違った。ラルクが辛くも勝利し、レイは完全に自信喪失していた。それはそうだろう。ラルクの動きはどう見ても戦い慣れてない人のものだったし、馬鹿正直にも型にはまった動きだった。しかも戦いに関する才能が感じられない、応用力のなさ。それでも、レイが負けた。偶然ではない。ラルクの技は、信じられないほど、完璧だったのだ。それこそ、才能を覆すほどに。

一体どれほどの修練を積んだら、ああなるのだろうか。私には分からない。

だから、戦ってみたくなった。

レイとラルクの戦いのあと、レジスタンスが結成された。私は教頭の異常な強さを思い出して、参加を決めた。そして、教頭が私達に稽古をつけてくれることになった。

最初、教頭の訓練は、私達の実力を見るだけだった。だから私とラルクの戦いはあっさりと許可された。

ラルクが回復したのは、レジスタンス結成から三日後、火傷のあともすっかり無くなっていた。シリアの回復呪文の腕には驚いたわよ。私よりすごかった。

いつものように、教頭が無駄に頑丈な結界を張り、私達はその中央で、五メートルの距離を置いて向かい合った。

武器に殺傷能力を無くすための魔法をかけ、私は右手に剣を構えた。

回りの観衆も、ぼつりと佇む隠れ家の入り口も、視界から追い出した。

ラルクは両手で下段に剣を構えていた。

「試合開始！」

教頭の声を図にラルクが呪文を唱え始めた。

「code：0334a・熱よ、激しくあれ」

私もすぐに呪文を唱えた。

「code：1204a・水よ、敵を打ち抜け」

いつもの水の守りを使うのは読まれるだろうと思い、攻撃魔法を放ったのだけれど、意外にも、ラルクはレイが私相手に最初に使つて失敗した魔法を使ってきた。

これなら守りの魔法を使えばよかったと思いつつも、私の放った魔法が一気にラルクの放った熱を冷ましていることを確認しつつ、剣を構える。

前方には、大分威力の衰えた私の魔法で体が濡れるのも気にせず、ラルクが突っ込んで来ていた。

剣の重さから見て、まともに打ち合ったら私が押されるのは明白だった。だから、私は新たな呪文を唱えつつ、ラルクの攻撃を受け流そうとした。そして、弾き飛ばされた。

ラルクの想像以上に速い攻撃は、私の反応速度ぎりぎりのものだった。受け流す余裕のなかった私は、真正面で受けてしまい、余りの衝撃に、自ら後ろに跳んで距離をとるしかなかった。

二メートルほど跳んで、受け身をとりつつ不完全な詠唱のまま魔法を放った。

私の手から放たれたいくつもの水の弾丸が、弱々しいものの何とか牽制の役割を果たし、ラルクの追撃を僅かに遅らせた。

その隙に跳び起きた私は、接近戦の不利を悟り直ぐさま別の魔法の詠唱に入った。

しかしラルクもまた、魔法を使っていた。

私の牽制を軽くないしながら、ラルクは呪文を唱え、いくつもの炎をその周囲に生み出していた。

それら全てを防ぐことは出来ないと分かっていた私が紡いだ魔法は、熱の軽減の魔法。体に纏った薄い水のベールは、ラルクが打ち出した炎の弾丸の威力を弱め、大量の水蒸気を出した。この視界の悪さでは、接近戦は仕掛けて来ないだろう。

私は今しがたつけた炎の応酬によって、あちこちを火傷していた。余りの痛みに体が上手く動かなかった。

次の一撃で決めなければ、私に勝ちはないだろう。そう判断した私は、一瞬躊躇ってから、この魔法を唱えた。

「code:1725b・水よ、全て飲み込め」

bクラスの魔法。学院の生徒は三年生になって初めて使用が許される、中級の魔法。しかし私達がこれを使用する事を禁止していた学院は、もはや存在しない。そう自分に言い訳して、私は最大威力で魔法を放った。

ラルクも何か魔法を放っていたのだろう。しかし私が放った巨大な水の渦は、魔法ごと、ラルクを飲み込んだ。

大量の水しぶきをあげ、ラルクは渦の中心に向かって引き込まれていく。

ラルクは呪文を唱える余裕はないようだった。

勝った……

私が確信したのとほぼ同時に、水の渦に向かって無数の光の帯が走った。

その帯は無理矢理ラルクを渦から引つ張り出すと、乾いた地面に放り出した。

教頭の魔法だった。

「試合終了。勝者セレナ」

教頭が不機嫌な声で言い、私を睨んだ。

「あ……」

「『あ』じゃない。セレナ、お前はラルクを殺す気かつ！」

私はこの時初めて、ただの試合だった事を思い出した。試合に夢中になっていて、危うくラルクに致命傷を与えるところだった。

「ごめんなさい……」

私は俯いて、小さく言った。

教頭がラルクを助けたおかげで、ラルクは無事、生きていた。意識を失っているラルクを見て、ウィルが、

「僕はセレナさんに逆らわないようにしよう……」

などと宣っていたが、私は弁解する元気もなかった。

私は全身の火傷の痛みに耐え兼ねて、そのまま地面に倒れ伏した。

「セレナちゃんっ！」

シリアが慌てて駆け寄ってきた。

それよりラルクの心配したほうが良いんじゃないの……？

と思いつつ、シリアの治療を黙って受けた。

「流石セレナちゃんだね……、ラルク君も強かったのに」

シリアが治療の合間に話し掛けてきた。

「……」

私は何も答えられなかった。

私は確かにラルクに勝った。しかしあんな勝ち方でよかったんだろうか。bクラスの魔法を使わなければ、間違いなく私は負けていた。あのくそ真面目なラルクの事だ、仮に使える実力があっても、bクラスの魔法なんて、使った事すら無いのだろう。

もし、ラルクもbクラスの魔法を使っていたら、勝てたのだろうか。否、きっと私は負けていただろう。同じ条件ならば、私が負けていたのだろう。

悔しかった。

私が、同じ条件で戦って負けるなど、絶対に認めたくなかった。

「セレナちゃん……、顔が怖いよ」

シリアがぼつりと言った。

怖いって……。

「うるさい」

むっとしてシリアに言った。シリアは泣きそうな顔になり、明らかに動揺して、治療の手がぶれていた。

余計に痛いって。

悪い事をしたかなと思いつつも、私はじっと黙って治療を受けていた。

今は誰とも喋りたくなかった。

私とラルクはその後しばらく回復に時間がかかった。私は全身の火傷が、ラルクは渦に巻き込まれた時の打撲が酷かった。

私達二人は、三日間の間、雑事と訓練を免除された。

「お前ら無理しすぎだろ」

レイが呆れたような目で見てきた。

お前に言われたくないわっ。

と思ったが、やっぱり私はだんまりを決め込んでいた。

「勝った癖に落ち込むとか、無性に腹立つな」

レイが何か言っていたが、無視。

「なあ、今の内に報復していいか？」

……何に対する報復なのよ。

レイのちよっかいを黙殺して、私は、寝ている振りを決め込んだ。やることといったら寝て回復を早める事しかなかったので、私は時間を持て余していた。

次にラルクと戦ったら、どうやって攻めれば良いだろう。そんなことばかり考えて、三日間ひたすらに暇を潰していた。

時々やって来るレイはとりあえず無視し、シリアなら適当に会話し、他は誰もやって来ない……

と思っていたら、二日目の昼に意外な奴がやって来た。

ラルクだった。

「……もう治ったの？」

私は驚いた。確かこいつは全身に打撲を負っていたはずだ。一日寝ただけで治るものか？

「え、まあ、そこそこは。それよりセレナは大丈夫？」

わざわざ確認しにきたのか。無駄に真面目な奴め。

「心配無用。明日には治ってるわよ」

「そつか、ごめんね、ちょっとやり過ぎちゃったかな」

「だから大丈夫だって言ってるでしょうが。加減してたら私が圧勝するわよ」

……虚勢をはってみた。

ラルクはそのまま、「失礼しました」とか言って部屋を出ていった。

……それだけかよ。

その後私は、ラルクがさっさと復帰してしまったから、私もいつまでも寝ている訳にもいかないあなどと考えながら、眠りについた。

三日目には、私は暇に耐えられなくなって、まだ完治していない体を無理矢理起こした。ラルクはあろうことが、回復しきる前から食糧の調達に行っていたらしいが、私はそんな愁傷な性格はしていないので、久々に体を動かして、こっそり自主訓練に励んで一日を終えた。

六話（前書き）

何とか間に合いました

六話

火傷もほぼ完治して、私は教頭の訓練に参加する事になった。訓練は朝の六時に、隠れ家付近で行われるということだった。

私は少し早めに来て、ぼんやりと空を見上げていた。

朝から張り切って照り付けている太陽は、まだ何もしていない私の体から、勝手に体力を奪っていった。こんなんでは昼には大変な事になるな……。私はそう思いながら、教頭が現れるのを待った。

ほどなくして、教頭を含む全員が集まった。

「お、本格的な訓練にはセレナとラルクが初参加だな。じゃあもう一回訓練の事について話すぞ」

こんなに暑いのに関わらず、教頭は今日も黒い長袖の服を着ていた。私はちよつと教頭の感覚器官を疑ってしまった。

「お前達は、まず魔王の有力な手下と互角以上に戦えるようにならなければならん。のんびりとやっている訳にはいかない。というわけだ、お前達はより強力な魔法を覚える必要がある。aクラスだけの魔法では、サタンはおろか、オーガ相手でさえ辛い。だからこれからほとんどbクラス、ひいてはcクラスの魔法を習得していく事を目標に訓練をやってゆく。もっとも、セレナは既に使えるようだがな」

最後のは皮肉めいた調子で付け加えて、教頭は私とラルクを見遣った。

「でも、そんなの習ってませんよ。どうやって使うかもさっぱりなのですが」

ラルクが聞いた。

「ふむ、それは心配無用だ。私が教えてやる。他の者はいつも通り練習を始める」

教頭がそう言うと、レイとウィルはそれぞれ魔法の練習を始めた。練習しているのはbクラスの中では簡単なものようだ。ウィルが

練習しているのは以前私も試した事がある。

「よし、ではおまえ達には、教えるところから始めるが、二人はどのくらい知っているのだ？」

「僕は知識としてなら、少しは。でも使った事はありません」

「私はbクラスなら、三つ使えるわ」

「そうか、セレナは、『水の渦』の他には何が使えるのだ？」

「『氷の散弾』と少し苦手だけど、『水の破壊者』」

私はぶっきらぼうに答えた。

「ふむ……、ラルクはどの属性の魔法でも使えるのだったな」

「はい」

「ならばせつかくだ、二人共、『水の召喚』を練習してみる。おまえ達なら、うまく応用出来るだろう」

「はい」

ラルクは生真面目に返事をし、私は軽く頷いた。

「では、とりあえず私が使うところを見ている。いくぞ」

教頭はそう前置きをして、左手を前方に突き出した。今更気付いたが、教頭は左利きのようだ。

「code:1400b・我が意志の支配の下、水よ来たれ」

教頭の前方に膨大な量の水が生じた。

一トンは軽くあるだろう透明な水は、落下することなく、教頭の前で漂っていた。

「これでここから様々な呪文に繋がっていくことができる。セレナの水の守りなど、これがあればずっと強くなるだろう」

教頭は水を滞空させたまま、視線で試してみろといってきた。

「code:1400b・我が意志の支配の下、水よ来たれ」

ラルクが淀み無く唱えた。

ラルクが突き出した右手の前には、直径一センチ程の、注意して見ないと分からないくらいの水球が出来た。

「……何それ、微生物でも飼うの？」

余りにも情けない大きさだったので、私は言ってやった。すると、

ラルクはすぐにそれを消してしまった。

「流石にbクラスは難しいね」

ラルクは特に気にしたふうもなく、何処が悪かったのか考え始めた。

教頭が今度は私に、やれという視線を送ってきた。

「code:1400b・我が意志の支配の下、水よ来たれ」

私は軽く右手を振った。すると、私の目の前の空間に、教頭の出したやつのおよそ三分の一くらいの量の水が現れた。

「す、凄い……」

ラルクは感嘆の声をあげた。

「code:1121a・取り巻く水よ、盾となれ」

続けて唱えた私の呪文で、普段より遥かにスムーズに、かつ大きく発生した水の守りは、私を完全に覆う程の水量をもって、周囲を循環した。

「ほう、まさか一発で成功するやつがいるとは。練習したら、さっきの私くらいは軽く出せるようになるのではないか？」

教頭ですら、感心していた。しかし、私からすれば、教頭の方が異常だった。教頭は、『さっきの』教頭よりはと言ったのだ。つまり、教頭はその気になれば、もっと大量の水を召喚出来るのだろう。私の隣では、ラルクがビー玉大の水の塊を召喚していた。

……やっぱり同年代なら私が最強よね。

その後私は召喚した水の扱いを練習していた。

5時間程、適度に休みをいれながら、私達はひたすら魔法の訓練に勤しんだ。

私が驚いたのは、ラルクの馬鹿が、5時間でたったの一回しか休憩しなかったことだ。一体どういう神経をしているのだから。彼が未だに意識を保っていること自体、驚嘆に値する。

昼になると、私達は分担して、薪を集めたり、食材を取りに行ったり、食事の準備を始めた。

私は近くに生えている、食用の植物を摘みに行った。

最近はずっかり慣れてしまった森の中を、食材を求めてずんずん進んでいた私は、ふと、妙な音を聞いた気がした。

足を止めて耳を澄ました私は、今度ははっきりと音を聞いた。

「オオオオ……」

森の中にこだまするこの音は、過去に何度か聞いたことがあるものだった。

「ゴブリンかしらね……。それも一匹じゃないか」

この声は、まさしく、ゴブリンのものであった。魔獣の中では、さしたる脅威ではないが、そもそもこの森に魔獣がいること自体が異常だった。

まだこの森は魔獣に侵略されていないと思っていた。

本来魔獣がいないはずのこの森にゴブリンがいるということは、周りの街の何処かが魔獣の手に落ちたのだろう。そう当たりを付けた私は、不安になった。

此処はいつまで安全なのだろう。

私達の隠れ家は、果たしてどれだけの間、持ちこたえられるのだろうか。

扉は隠されているが、完璧でない。いつ魔獣にばれるか知れない。私が固まったまま自分の思考の世界に潜り込んでいると、いつの間にか、私の周りに五体以上のゴブリンがいた。

はつとした私は、自分の手に武器がないことに気が付いて、直ぐさま呪文を唱え始めた。

「code：1204a・水よ、敵を打ち抜け」

訓練で魔力をほとんど使いきってしまった私は、簡単な魔法の連発で応戦することに決め込んだ。

ゴブリンの比較的単調な攻撃をかわしながら魔法を放つ事、十発。致命傷は与えられなかったが、私の方が強い事に気が付いたゴブリンどもは、だんだんと弱気になり、ついには逃げ出した。

「ふう」

私はホッと一息ついて、隠れ家の方を向いた。

このままこの森にいるのは危険だろう。

そう判断した私は、まだ少ししか中身の詰まっていない籠を持って、元来た道を引き返す事にした。

どうやら魔獣に遭遇したのは私だけではなかったらしい。

隠れ家に戻ると、レイとウィルが、疲れた様子で床に寝そべっていた。ウィルに至っては、どうやら怪我をしているようだった。

「あんた達も魔獣に襲われたの？」

私が二人に聞くと、二人は黙って頷いた。

「あ、セレナちゃん、無事だった？」

救急箱をもってパタパタと走ってきたのは、シリアだった。確か彼女は、隠れ家で料理を始めていたはずだから、無事だったのだろう。

「私がそこの魔獣にやられるわけがないでしょ」

私が軽く返すと、シリアはホッとした様子で、怪我をしているウィルの右腕の消毒を始めた。

「というかセレナ、おまえ元気だな」

「レイ……、あんたに言われると侮辱にしか聞こえないんだけど」

普段から無駄に元気なレイに言われて、むっとしながらレイを睨み付けてやった。するとレイはあきらさまに視線を逸らした。どうやら私と争う元気も無いらしい。これは重傷だ。

「二人共一体何に襲われたのよ」

「俺はやたらとでっけえゴブリンに出くわしちゃった。ウィルはレッドウルフに出くわして、危うくやられるところだったそうだ。まったく……恐ろしい話だぜ。俺らの飯はどうなるんだ」

「そうよね、私もほんの少ししか取って来れなかったから、しばらくは貧相な食事が続きそうね。……と、レイ、そんなことより、ラルクとヘイドはどうしたのよ」

「なんで俺に聞くんだよ。そんなの知るか」

「レイ君冷たいですよ。ヘイド君は最初に戻ってきましたが、ラルク君が戻って来ないので探しに行ってくれました。ラルク君は鹿かウサギを捕まえにいったはずですから、行き先は大体見当がつきますし、二人共もうすぐ戻って来るんじゃないでしょうか」

シリアが言った通り、二人はすぐに戻って来た。

「二人は怪我してない？」

シリアが二人にも聞いた。

「僕達は大丈夫だよ」

ラルクが答えた。

「ところで教頭は？」

私はふと気になって尋ねた。

「私はここだが？」

いつの間にか部屋の隅に教頭がいた。

「先生、どうしますか？このままじゃ安全に食料を取って来れませんよ」

ラルクが心配そうに尋ねた。

「ふむ、確かに、今のお前達だと、オーガあたりに出くわしたら少々危険かもしれないな。しばらくは買い置き食料でどうにかして、その間に私が森にいる魔獣の強さを調査してこよう」

「お願いします」

かくして、しばらくの間は、私達は隠れ家付近しか出歩く事が出来なくなった。

それから数日の間、私は隠れ家のすぐ側で、魔法の練習をして過ごした。

隠れ家には、教頭の物と思われる、魔法の本が何冊あったので、それを勝手に読んで、私は技を磨いていた。

ラルクは、信じられないくらい根気と集中力で、日々水の召喚を練習し、いつの間にか、私が最初に出した量と同じくらい召喚出来るようになっていた。もっとも、その頃には、私もさらに成長し、

その二倍近い量の水を召喚出来るようになっていたが。

他の二人も、徐々にbクラスの魔法を使いこなせるようになって、私達は魔獣に対抗する力を養った。

教頭の調査が終わったのは、私達が最初に練習していた魔法をおよそマスターした頃だった。

七話（前書き）

何とか更新できましたが……

短いです。

七話

「大丈夫だ、森にはせいぜい強くてもレッドウルフしかない」

教頭は私達を集めて言った。

「一応安全のために、今度からは二人一組で出かけるようにしろ。そうだな、シリアとセレナ、ヘイドとラルク、ウィルとレイで組めば、だいたいどの組も大丈夫だろう。この三組で薪集めと食材調達を分担してやれ」

「はい」

ラルクだけは真面目に返事をし、私達はいつも通りに朝の訓練を始めた。

「ふむ、皆それなりの形になってきたな。レイ、もっと丁寧に咏唱をしな。ラルク、イメージが足りてない。もっと大きなものをイメージしろ。細かい事は気にするな」

私達は、bクラスの魔法の扱いにかなり慣れてきて、始めの頃より遥かに強い魔法を放てるようになっていた。これなら森でレッドウルフに出くわしても、難無く倒す事が出来るだろう。

流石にへとへとの状態で森に入るのは危険なので、私達は休憩をとってから、食料調達のために森に入った。

私はシリアと二人で薪を集めた。

時々出くわす魔獣は私がほとんど一人で倒してしまった。ま、所詮雑魚の集まりだもんね。この辺の奴らは。

ある程度、薪が集まったところで、私達は一度隠れ家に戻ろうとした。ちょうどその時、私の視界に妙な男が映った。

その男は、あちこちが破れたボロボロのコートを着て、非常に危なっかしい足取りで、あつちにふらふら、こつちにふらふらしていた。

「何？あの怪しげなオヤジは」

私が言つと、シリアも気付いたようで、「大丈夫かなあ」など

と心配し始めた。

よくもまあ何処の誰とも知れぬ赤の他人を心配出来るものだわ。すると突然、男の重心が前に傾いた。

まるで時間がコマ送りに進んでいるかのように、男は前にゆっくりと傾いていき、手を出すことすらせずに、そのままごっこつした地面に前から倒れてしまった。

「あつ！」

シリアは小さく声を上げ、ちらつと私の方を見ると、私がさつさと帰ろうとしているのに気付いたのか、気付かなかったのか、すぐに男の元に走って行ってしまった。

あーあ、またなんか面倒な事になりそうだなあ。などと思ったものだが、実際、私の予感は当たってしまったのだった。

いつものように、手早く治療を始めたシリアは、倒れた事によって男が負った傷を次々に消毒したり、塞いだりしていった。明らかに、この見ず知らずの男の治療を終えるまではその場を離れる気はないようだった。

私は仕方なく、無防備な状態の二人を守るべく、周囲へ警戒を強めた。

二回ほど、私が二人を襲おうとしてきた不届き者のゴブリンを始末している間に、シリアは治療を終えたようだった。妙に早いなと思って見てみると、シリアが施したのは明らかにその場凌ぎの応急処置だった。

「この男はどうした訳？」

私が尋ねると、シリアは、疲れて気を失っているだけだと答えた。

「で、こいつをどうするの？」

と私がきくと、予想通りというか、何と云うか、シリアは、隠れ家に連れていってもっとしっかりと治療すると言った。

私は内心面倒だなーなどと思いつつも、仕方ないと諦めて、シ

リアと二人で男を隠れ家まで運んだ。

「どういう事だ」

私達が隠れ家に入ると、教頭が凄まじく険悪な顔で聞いてきた。どうやら酷くご乱心のように……。

「その男は何だ」

私達が何も答えないので、更に一段階低くなった声で教頭が聞いてきた。凄まじい迫力ののった声は、私ですら足がすくむほどのものだった。

シリアは震えて声も出ないようなので、私がなんとか答えた。

「森で倒れていた男……です」

思わず敬語になってしまった。

「何故部外者をここに連れてきた」

「す、すみません。た、たた倒れてて、ほつとくことがで出来なくて……」

今度はシリアが震えながら答えた。

「馬鹿者がっ！この事が魔王やらその配下に知られたらどうする気だ。そいつが魔王に操られていないとは限らんのだぞ」

その後教頭が口封じと言ってその男を殺そうとしたので、驚いた私達は、ラルク達も含めて全力で教頭を止めた。

「お前達はそんなに魔獣にやられたいのか。ふん、私はどうなっても助けてやらんからな。覚悟しておけ」

教頭は最後にそう言っただけ押し黙ってしまった。

それからというもの、教頭がやたらと重い空気を辺りに振り撒くものだから、私達は生きた心地がしなかった。

時たまレイがぶつぶつ文句を言っていたが、誰も教頭に話し掛ける事が出来なかった。

謎の男が隠れ家にやって来た次の日、その男が目を覚ました。

「うう……」

適当に空き部屋を宛てがわれていたその男は、くぐもった呻き

声をあげると、しばらく毛布の上でうずくまっていた。その頃私達は、別の部屋で朝食を取っていたのだが、異常に耳の利くレイが、呻き声が聞こえるというので、私達は男が目覚めた事を知ったのだった。

「何か、食べる物をくれ……」

私達が男の元にやってくるなり、男は食べ物要求してきた。

シリアが何か食べる物を取りに行っている間、私はこの胡散臭い客人を観察していた。

伸び放題の髭は雑草のように好き勝手な方向を向いていて、更に体からは何日体を洗っていないのかと聞きたくなるほど酷い悪臭がしていた。

私達はさりげなく男と距離を取って、その一挙手一投足を見張っていた。

シリアが適当な食べ物を持ってくると、その男は凄まじい勢いで食べ始めた。一体どれくらい腹が減っていたのだろうか。

私達の貴重な食料が次々と減っていくので、レイが恨めしそうに男を見ていたが、男はまるで頓着せず、ただひたすらに食べ続けた。

腹に食物が詰まって落ち着いたのか、その男はようやく私達のことを見た。

「おっと、これは失礼した。私はグルーアルという者だ。訳あって森の中で死にかけていたのだが、おかげさまで、無事に助かったようだ」

見た目とは裏腹に、幾分か教頭よりは親しみ易い感じで話しかけた。

「あの、あちらの部屋で水浴びが出来るので、宜しかったらどうぞ」
シリアが、体を洗ってくることをグルーアルに勧めた。私は、内心では早く体を洗えと叫んでいたもので、グルーアルがシリアに礼を言って部屋から出ていった時には、心の中でガッツポーズをした。
グルーアルが部屋から出ていくと、私達は早速男の素性について

て議論をかわした。

「案外まともな人じゃねえか」

レイの意見に、直ぐさま私が食らいついた。

「あんなに魔獣が徘徊している森のど真ん中で武器も持たずにさまよっていた人間のどこがまともなのよ」

「一日中やたらと暗い空気を振り撒き続ける教頭よりは遙かにまともだろ」

「どうして変人の代表と比べるのよ。教頭と比べたら世の中の人間皆まともになるわよ」

「そんな……、先生はそんなに変な人じゃないでしょ」

ラルクがそんなことを言っていたが、私とレイの中では教頭は間違いなく変人だった。

「大体、魔獣がいなくなつたって普通はあんなただ広いだけの森に入ったりはしないわよ。街道を通ればずっと楽に行き来出来るんだから」

私がそう主張すると、今度はレイが、

「だけど一部の街道は魔獣に占領されてて使えないじゃねえか」

と言ってきた。そのあとも、グルーアルが戻ってくるまで、私達の議論は続いた。

グルーアルが戻って来たので、私達は結論が出ないまま、議論を中断した。

その後、グルーアルに帰るあてがない事がわかり、教頭も何も言わなかったなので、私達は彼を泊める事にした。教頭は彼を信用していないようなので、多分見張っておく為にも、泊めておく方がよいと判断したのだろう。

それから数日の間、ほとんど教頭がグルーアルを監視していたのを、私は知っている。

八話（前書き）

先週は大変失礼しました。模試のおかげでパソコンをつける暇すらなかったのです……。

今週はちゃんと更新できましたよ。

八話

グルーアルが隠れ家にやってきてから、半月が経過した。

その間、教頭の機嫌は低迷を続け、私達は朝の鍛練が地獄に思えて仕方なかった。教頭の言葉一つ一つに刺があったのだ。

しかしグルーアルの方は、特に何のトラブルも起こす事なく、上手く私達の生活に溶け込んでいた。

しかし私達の間では、ひそかに彼に対する疑惑の種が芽吹き始めていた。

レイが言う事には、グルーアルは夜中に、毎日こっそりと自分の部屋を抜け出して何処かに行っているのだとか。また、ウィルの主張では、教頭があつた男をやたらと警戒するのには何か訳があるのではないかとか。

正直なところ、私もあの男は怪しいとは思っていた。まず、あの男はやたらと厚着を好む。最近は夏の盛りも過ぎ、少しずつ涼しくなってきたはいるが、まだ長袖の服を着る季節でならない。それなのに、グルーアルときたら、分厚いコートを何時も羽織っている。一体何を考えているのやら。教頭より厚着ではないか。

数々の奇行が噂されるグルーアルだが、疑うことを知らないラルクとシリアとは、すぐに仲良くなってしまった。親しみ易い奴ではあるのだ。確かに。

かくいう私も、別に彼と特別距離をとっていた訳でもない。用があつたら私から話し掛けることもあつたし、逆に話し掛けられたら、何かしら答えてはいた。

しかし、教頭はとにかく不機嫌で、グルーアルとは一切口を利こうとしなかった。私達ともほとんど口を利かなかったのだが。

そんな、教頭が、珍しく、数日帰って来ないと言い残して、どこかに出かけていなくなっていたある日、隠れ家に蓄えていた食料のほとんどが切れた。

もちろん、普段から周辺の森で食料を取ってきたりはしているのだが、それだけではどうしても調味料の類が手に入らない。なので私達は時折ゼルメス（私達が最初に武器を買いに行った街よ）まで買いに行っていたのだが、いかんせん、ゼルメスは遠い。

誰も街に行きたがらないので、通例通りじゃんけんで決める事になる。と思つたら、ここでグルーアルが、自分が行くと名乗り出た。世話になっているだけなので罪悪感があるからだとか何とか。

勿論私達は誰も反対しなかった。しかし通例、買い物は二人で行くことになっている。持つてくる荷物が多過ぎるのだ。

もう一人は誰にするとした時に、今度はラルクが名乗りでた。多分、多少なりともグルーアルを警戒して、仲がそれほど良くない私やレイに気を使ったのだろう。それにグルーアルの戦闘能力は未だ不明なので、シリアやヘイドがいくのは危険だろうし。

そういうわけで、買い出しにはラルクとグルーアルという組み合わせで行く事になった。

お金は、何故だか教頭のポケットから無尽蔵に出てくるので、それを使えばよい。

ラルク達は早朝に出発して、何事も無ければその日の晩に帰ってくるはずだった。

何事も無ければ。

何事かあったのだろう。その日、ラルクとグルーアルが帰ってくる事はなかった。

「二人共大丈夫かな……」

翌日の朝、二人が帰って来ていない事に気がついたシリアは、しきりに二人の身を案じていた。

「二人じゃなくて、ラルクの心配をすれば十分じゃない？」

シリアに、私は皮肉を込めて言っちゃった。

トラブルの発端はグルーアルだとか考えられなかった。だってとにかく怪しいんだもの。

私達は心配になって、ラルク達の搜索に乗り出す事にした。

とはいえ、森の広いこと広いこと。全体を搜索することはほぼ不可能なので、私達は街までの最短ルートを通ってみることにした。多分ラルクもこの道を通ったであろうと信じて。

しかし搜索は難航した。

何せ、私達は搜索のエキスパートでも何でもない。少しでも変わった物を見つけたら、その度にみんなを呼ぶものだから、ちよつと陥没した地面だとか、飛び出た木の根っこだとか、実にしょうもないもので、時間がどんどんと浪費されていった。

時々、レイの奴が飽きて作業能率が著しく落ちるから、私はいちいち活をいれてやらなければならなかった。

昼までは全員で捜していたが、ラルク達が戻って来た時の為に、シリアとヘイドを隠れ家に戻らせた。

その後も私達は捜し続け、とうとう森を抜けきつて、ゼルメスまで来てしまった。

私達が街に着いた頃には夕方になっていて、私達もすっかり疲れ切っていたので、情報收拾も兼ねて、適当な宿に入る事にした。お金はちゃんと、勝手に教頭のお金をいただいてきてある。

そこで、たまたま来ていた人々に、何か変わった事はなかったかと聞いて回ったが、あっちの村が魔獣にやられただの、こっちの村でも魔獣にやられそうだのといった、ラルク達とは特に関係なさそうな話ばかり聞かされたので、私達は疲れきつて、宿のベットに倒れ込んだ。

「なあ、もう二人共隠れ家に戻ってるんじゃないか？」

翌朝の食堂で、レイが愚痴を零した。しかし、もしラルク達が戻っていたら、ヘイドが、私のペンダントにかけてある魔法への魔力の供給を断つ事になっている。そうすれば、私のペンダントは形を保てなくなり、ラルク達が帰って来たことがわかる仕組みになっていた。

しかし未だ私のペンダントは、綺麗にその形を保っていた。

ちなみにこの魔法具は、ヘイドのお手製だ。彼は、そういった、魔法を使った物作りが非常に上手い。

そんなこんなで、朝からやる気が無くなっているレイを無理矢理動かして、私達は再びラルクの搜索を開始した。

日が改まると、何かしら起こるものだ。昨日はいくら探しても何も出て来なかったものが、この日になると、一気に色々見つかりだした。

最初の発見は、ウィルの功績だった。彼が、ラルクの物と思われる小さな布袋を発見したのだ。その布袋は血で汚れていて、何か良くない事が起こっている事を私達に予感させた。

これはラルクが出かける時に持って行った物に違いないと思った私達は、直ぐさま袋の中身を確認した。しかし中身は空っぽ。しかし何としても何かの手掛かりに繋がらなかった私達は、その袋からより多くの情報を引き出そうと、躍起になって袋を調べた。

すると、袋についている血が、何かの記号を表しているように見えてきた。

「何かな、この記号」

私が首を捻っていると、レイが、

「マス目、かな？」

と言い出した。確かに、縦に三本、横に三本、線が交差していた。「じゃあ、このマスとこのマスに書かれているのは何よ」

「間違っただけじゃねえか？なんかぐちゃぐちゃしているし」私が指指したのは、真ん中の列の一番上と下のマスに書かれているギザギザした線だった。間違いにしては、血で書いたとは思えない位に緻密な線で書かれていた。

「ああもつ、わかんねえ」

レイが考えるのを放棄した。本当に短気な奴。

しばらく考えていると、私にはそのギザギザが王冠に見えてきた。ちょうど同じ事を考えていたのか、ウィルが「王冠……？」と呟いていた。

「これってチェスの盤じゃないかしら」

とうとう、私の頭に答えが閃いた。

「チェスって何？」

ところが、あるうことか、この連中、誰もチェスというものを知らなかった。

「駒を取り合うゲームよ」

と私が説明してやると、レイが、

「そうか。で、これがチェスだとして、何なんだ？」

確かに。チェスは何を意味しているのか、さっぱり解らなかった。結局、私達は再び歩き回って捜し回るしか無くなった。

しかし次の発見は直ぐにあった。

とある寂れた宿屋で、ラルクとグルーアルらしき人が運ばれているのを見たという情報を手に入れたのだ。

何でも、黒い髪の少年と、髭もじやの男が、眠った状態で運ばれていたのだとか。

「そいつらはどこに運ばれてったんだ」

レイが宿屋の主人に詰め寄った。

「それはあれだ。あそこにちげえねえ」

「あそこってどこだよ」

「ほら、あそこ。なんだつけ。あの、いかにもな感じの……、えつと……」

宿屋の主人は散々私達を焦らした揚げ句、たまたま近くにいた従業員に聞いた。

「なんだつけか。あの、いつも人が運ばれていくところ」

「ああ、あの研究所だとか名乗っているところですか？」

「おお、そうだよ。そう。『研究所』だ。あっちの方にいくと妙な連中がうるついている通りがあるだろ？そこに、古臭い工場みたいな建物があつてよ、『研究所』って書いた看板吊り下げた建物があるんだが、そこに時々、眠った人を担いだ真っ白な服を着た連中が

入っていくんだよ。前々から、ありやどつかから拉致してきたんでねえかとはおもっていたんだが、やっぱりそうだったか。もしあそこに殴り込みにいくんなら気をつけるよ。真っ白な服を着た連中はガリガリでたいして強そうには見えねえけどよ、逆に真っ黒なコートを着た奴らは筋骨隆々なのがわんさかいるからな」

そう言つて、宿屋の主人は私達の背中をどんと叩いた。

私達は礼をいって、宿屋の主人が指し示した方に向かった。

「どうするよ。ラルク達は拉致されたみてえだぞ」

歩きながら、レイが言った。

「決まってるじゃない。取り戻しにいくわよ」

「殴り込みに行くのか？」

「いくわよ」

「でも、何の証拠もないのにいきなり殴り掛かるのはまずいよ」

ウィルが冷静に私に言った。しかし私は、証拠なんて捜している場合ではないと思った。

「証拠なんて後から見つければいいのよ。とにかく殴り込むわよ」

この時の私は大分殺気立っていただろう。こんな搜索に膨大な時間を掛けさせた奴が憎くて仕方なかったのだ。

ホントに疲れたんだからっ！

という訳で、私はウィルの制止を無視して、件の建物に向かってずんずん進んで行った。

建物は、研究所というに相応しい威容を誇っていた。

そんな建物の外観を気にも止めずに、私は正面の扉を破壊しようとして、ウィルに止められたので、強く二回叩くに留めておいた。敵にわざわざ侵入を報せてどうするのだから。

九話（前書き）

短いです……

九話

私のノックに抑え切れない怒気が籠っていたのにも関わらず、中からは丁寧な対応が返ってきた。

「何のご用件でしょうか？」

柔らかい物腰の、男性の声が返ってきた。

対応を考えていなかった私は、何とか怒気を鎮めて、見学させて貰えないかと尋ねた。

「極秘の研究を行っているため、見学は受け付けておりません」
体よく断られ、私はいきなり最後の手段に出る事にした。

「私の友達がお邪魔していませんか？黒い髪の少年なのですが」

「いいえ。此処には研究者と、モルモットしかいませんよ」

「モルモットに……、人間を使っているだろ」

とうとう抑え切れなくなった私の怒りが、言葉という刃をもって、扉を抜けた。

しかし相手は一切慌てた様子もなく、

「何を根拠にそのようなことをおっしゃるのですか？」
と言った。

「あんたらが、度々人を眠らせて此処に運んで来ていることが、街で噂になっている」

「根も葉も無い噂ですよ」

「しかし……」

尚も私が言い募ろうとした時、

「ちょっと待ってくれ」

真っ白な服を着た男が、私を押し退けて、建物に入ろうとした。

「……その手に抱えているのは誰だ」

私は、男が背負っている中年の男性を指差して言った。
すると男は、

「ん？ああ、こいつな。こいつは、あれだ。ちよつと酒を飲み過ぎ

てな、酔い潰れちまったから、こうやって運んでたのさ」

おもいつきり目を泳がせて、いかにも今思い付いたような嘘をついた。

扉の向こうからため息らしきものが聞こえてきた。

私は直ぐさま、担がれている男を、魔法で強制的に目覚めさせた。

「ふにや……俺の目玉焼き………って、え？何処だ誰だ？」

目覚めた中年の男は、はつきり呂律が回った口で、「まるで」酔っ払いみtainな事を口走った。しかし酔っ払ってはいない。

「……仕方ありませんね」

観念したのか、扉の向こうから諦めたような声が聞こえてきた。

と思いきや、私達の頭上に無数の氷の塊が生じた。

防ぎきれないと悟った私は、目の前の扉を蹴破って中に転がり込んだ。遅れてレイとウィルも入ってくる。

「うおっ、危ねえ！」

外にいた男が叫んでいたが、私は無視して建物の中にいた男を睨んだ。

と思つたら男は別の部屋に駆け込んでいるところだった。

「逃げるなっ！」

私は怒鳴るなり、直ぐに追い掛けた。

後ろからレイ達もついてきた。

怪しい小物や、何やらよく解らない試験官が散乱している部屋を通り過ぎ、地下に向かう階段を下りて、いくつかの扉を潜り、何やらだだっ広い部屋に着いた。

ラルクを捜して延々と歩いた後の全力疾走は辛かったが、それでも取り敢えず相手を追い込んだ。

この部屋に続く扉は私の後ろにしかなかったのだ。

「……観念しなさい」

私は男を睨み据えて言った。

「いいえ、観念するのは貴女の方ですよ」

さっきまで必死に逃げていたくせに、男は余裕を見せてきた。

「安心して下さい。此処なら多少暴れた位なら崩れたりしませんから」

「その為に此処まで逃げてきたのか」

私は周囲を警戒しながら言った。

「そうですね……、それもありますが、それよりも……」

男がそこまで言ったのとは同時に、私達の後ろの扉が開いた。

「緊急時にはこの部屋に集まる事になっていたからといった方が正確ですね」

男の最後の言葉は私達の耳に入ってはいなかった。

私達の後ろから現れた、白黒の集団。白い服の人間が四人、黒い服が六人。数では私達が圧倒的に不利になってしまった。

私達は挟み打ちに合うのを避ける為に、部屋の隅に移動し、戦う用意を整えた。

敵は魔法で殲滅されるのを防ぐ為に散開したが、私達は一箇所に固まらざるを得なかった。部屋の中央は既に取られている。

「code:1400b・我が意志の支配の下、水よ来たれ」

相手の出方が解らないので、私は取り敢えず、何時でも全員を守れるように水を召喚した。その間に、レイとウィルが簡単な攻撃魔法で牽制をかけていた。

しかし敵は二人の攻撃を軽くかわし、白服の奴らが一斉に攻撃魔法を放ってきた。

全てaランクだが、精度は上々、属性は光と地が主か。

私は召喚した水のほとんどを使って盾を作ったが、一部の魔法は抜けてきた。

「っ！防ぎきれない」

抜けてきた魔法も大分威力が衰えていたので、私達にダメージはなかったが、此処に固まって戦いきるのは不可能だと私達は悟った。ならば魔法で攻撃出来ないように、接近戦に持ち込むしかないという事で、私達はそれぞれ手近な敵に突っ込んだ。

私は腰に提げた剣を引き抜き、手近な黒服の男に切り掛かった。

男は武器を持っていなかった。しかし油断はしない。

案の定、男は素手でも十分私とやりあえた。

男の異常な運動能力は、私の速さを重視した攻撃を次々とかわしていく。

時々、男がかわしきれない攻撃を放つても、男が腕につけた金属の輪によって弾かれた。

しかし接近戦をしている限り、白服の連中は手出し出来ない。黒服の奴らを巻き込んでしまうからだ。

実際、前に出て戦っているのは、全て黒服だった。白服は魔法専門らしい。

しかし黒服は全部で六人いた。私達は三人。私達は一人で二人を相手しなければならなかった。

私が最初の男と戦っている間に、後ろから別の男が襲ってきた。

私は何とか挟み打ちを避ける為に、位置を入れ替えようとしたが、上手く行かず、前後からの攻撃に対応しきれなくなった。

敵の攻撃がかわしきれず、完全に敵の手に落ちてしまった。

敵に首を閉められ、呪文の咏唱も出来ず、体から力が抜けていき

……

霞む視界の中に、私と同じように、今にもやられようとしている、レイとウィルが映った。

十話（前書き）

話を追うことに一話あたりが短くなってゆく……

十話

僕がグルーアルと共に隠れ家を出て、始めの三時間は特に何事もなく、至って平和な行程だった。

時々出くわす魔獣達は、僕一人でも十分に対処出来るレベルだったし、グルーアルが存外に強かったこともあり、特に危険もなかった。

グルーアルは、珍しい戦い方をしていた。

グルーアルは、魔法を一度も使わないのだ。今や便利な魔法が多数発見され、たとえ苦手な者でも体術の合間に魔法を使ったり、自分の身体能力強化の魔法を使ったりして戦うのが一般化しているというのに、グルーアルは常に己の拳一つ、殴ったり蹴ったり、そこから辺に落ちていた手頃な枝で叩きつけたり、とにかく肉弾戦だけなのだ。それなのに、信じられないほどに強かったのだから驚きだ。常に的確に相手の急所を狙い、素手で僕の剣を使った攻撃並の威力を叩きだしたりしていた。

「強いですね」

僕がいうと、

「いやいや、君程ではないよ」

と謙遜していたが、僕らは名門と言われていたテレストス学院で訓練を積んできたのだ。一般人のレベルよりはずっと高いはずだ。そんな僕達でさえ、グルーアルと一対一で戦ったら、負けるかもしれない、と思うほどだった。まあ、セレナや僕、レイの三人は多分勝てるだろうと思う。でも、学院の中でも比較的強い方だったであろうウィルでさえ、グルーアルに勝てるかどうか怪しいだろう。

「その戦い方って、一体何処で学んだんですか」

僕が聞いてみると、グルーアルは解らないと答えた。

「え、解らないというのは……？」

「実は、私の記憶がすっかり無いんだよ。自分が何処の誰で、あの

森で何をやっていたのか……、気がつけば、私はあそこにいて、それで食べるものが何も無くて、意識を失って……と、まあそんな訳だから、私自身、自分のことがよく解らないのさ。すまないね。いろいろと世話になっておきながら、私は君達に何もしてやれそうにない」

「そうだったんですか……」

二の句が継げずに、僕は記憶を失うというのはどういった感じなのだろうとぼんやり考えながら、森の起伏の多い道を歩いた。

事件が起こったのは、特に話すことも無くなって、機械的に足を動かしていた頃に起こった。このとき、ゼルメスまでは、あと数十分の距離。街が見えようとしているところだった。

最初、僕達の前方の茂みが揺れた時、僕もグルーアルも、ゴブリンかなにかの魔獣だろうと思った。感覚を研ぎ澄まして、戦闘に備えた僕は、茂みの揺れ方から相手は二、三匹だろうと当たりをつけた。

僕の予想通り、茂みに近づくと、三つの影が見えた。しかしそこで僕は、それがゴ布林ではない事に気が付いた。

そこにいたのは、人間だった。

このような魔獣が徘徊しているだけで、中に入ることにほとんど何のメリットもないような森に人間がいる事は珍しい。そう言いつつも僕達だつてこの森を棲みかにしているのだが。

僕が不思議に思つて、その茂みに屈み込んで何やらやっている人々を何気なく見と、向こうもこちらに気が付いたようで、強張っていたのだらう、腰を軽く叩いて、ゆっくりと立ち上がった。

真っ白な服の男が一人と、対照的な黒服の男が二人。いつかゼルメスで同じような恰好の人達を見たことを思い出しつつ、僕はとらあえず口を開いた。

「あの……、こんなところで一体何をなさっているのでしょうか。ここは魔獣も出るので、危ないですよ……？」

言っている途中で、僕は相手の様子がどこかおかしい事に気が付

いた。相手は僕の方を少しも見ていなかったのだ。彼らの視線の先にいたのは、グルーアル。三人ともが、何かを見極めようとするかのように、グルーアルを凝視していた。対するグルーアルは、何故見つめられているのかは解らないらしく、いきなり凝視してくる人々の視線に押されて、目が泳いでいた。

「グルーアル………だな」

白服の男がグルーアルをはたと見据えて言った。その声には、多分の喜びが含まれていた。

僕は、もしかしてグルーアルが記憶を失う前の知り合いに出会ったのかと思い、これでグルーアルも記憶が戻るかもしれないと、内心で期待した。

しかし、僕はその男の喜びが、獲物を見つけたハンターの喜びだった事には、気が付いていなかった。それはグルーアルも同様だったように、

「確かに、私はグルーアルだが」

と答えた。……いや、答えてしまったと言った方が適切だろうか。「ふふ……、何たる偶然。よもやこのようなところでおまえに会うとは。しかもその様子では、あのまま記憶を失ったようだな」

そうやって、怪しい笑い声を上げるなり、白服の男は大きく後ろに跳び、僕達と距離をおいた。そして、一言。

「やれ」

すると、二人の黒服の男が、いきなり飛び掛かってきた。

何となく不穏な空気を感じていた僕は、直ぐさま剣を抜き、応戦したが、その男達の動きの速いこと。彼らもまた、グルーアルと同様に、素手での戦いのエキスパートだった。

二人の内、一人が僕に向かってきたのだが、こちらが武器を持っているのにも構わず、突っ込んできた。

僕が剣を横に降り抜くと、男は驚くべきことに、その僕の攻撃を爪で受け止めた。………いや、本当に。

僕は激しく動揺し、敵の拳をもろに喰らってしまった。

何故か、ほとばしる僕の鮮血を見て、僕は直ぐさま相手の手を見た。

そこには、どう見ても人間のものとは思えない、異様に発達した、真つ黒な爪がはえていた。さっき僕の剣を受け止めたのはこれかと納得しつつ、何をどうやったらあんな爪がはえてくるのかという疑問が僕の頭の中で渦巻き始めた。

しかしそれも、男の追撃によって、たちまち僕の重要項目リストから除外された。

腹の痛みを堪えながら、剣を振るい、呪文を口ずさむ。

「code：0334a・貫け。赤き炎よ」

ちょうど僕と戦っている黒服の男と白服の男と僕が一直線上に並んだところを狙って魔法を放った。

黒服の男は後ろに白服がいることを知っていたのか、避ける事をせず、僕の魔法をもろに受けた。

「ぐあつ」

手加減無しの本気の一撃は、一人の人間を戦闘不能にするのに十分な威力だった。はずだった。

地面に倒れた男が、数瞬の後に起き上がったとき、激戦を繰り広げているグルーアルを助けに行こうとしていた僕は、我が目を疑った。

男のタフさもそうだが、男の体の変化が、僕の脳の活動を一時停止に追い込むほどに異常だったのだ。

真つ赤に充血した目は、人間のものとは思えないほどに煌々と光り、全身から生えた体毛は、皮膚を覆い隠す程に伸び、元から長かった爪は、エモノを軽く串刺しに出来そうなほどにまで伸びていた。獣のようなその体躯から立ち上る殺気に充てられて、僕は反応が遅れてしまった。

僕が一步退く間に僕との距離を詰め切った男は、魔法の加護をかけてもここまではいかないのではというくらいの凄まじい力で、僕の腹に拳をめりこませた。

僕の意識はそこで途切れた。

十一話

僕の意識はすぐに回復した。

ぼんやりとしか見えない曖昧な視界で辺りを見回すと、まだ太陽は高くにあり、僕の魔力はいまいち回復していなかった。意識を失ってから数十分から一時間といったところだろうか。

僕は誰かに担がれているようだった。不規則な振動が、殴られた腹に継続的にダメージを与えていた。

僕はげんなりとしながら、何者かの手から逃れようとしたが、恐ろしいことに、体にまったく力が入らなかった。麻酔の一種だろうか。僕は何とか自分の思い通りに体を動かそうと色々試みたが、動くのは瞼と指先くらいで、僕をかついでいる男は僕が目をさましていることにすら気が付いていないようだった。

僕を担いでいる男は、真っ黒なコートを着ていたので、おそらく僕達と戦った男なのだろう。周りを見ると、他にも黒服と白服の男達が何人か、並んで歩いていた。そのうちの一人の黒服は、僕と同様に気を失っているブルーアルをかついでいた。

いつの間にか、ゼルメスのどこか細い通りに入っていたようだ。流石に気を失った人を二人も担いだ状態で表の通りを歩くことはできなかったのだろう。誰も歩いていないような薄暗い道を進んでいた。

僕は何とかしないと不味い状況だという確信のもと、わずかな期待を寄せて仲間達にメッセージを残しておくことに決めた。とはいっても皆がこれを見つける可能性はごく薄かったのだが。

僕は腰にくくりつけていた布袋を、何とか取り外して、うまく動かない手を必死に動かして、仲間達にメッセージを残すことに成功した。

とはいえまともに文字が書ける状態ではなかったので、いくらか暗号じみたものになってしまったが、まあ、皆ならわかってくれる

だろう。

僕が残したのは、チェスというボードゲームの絵。このボードゲームは、白と黒の駒が互いの王をとろうとするゲームなのだが、何を表したかったかと言うと、要は白黒の服を着た連中が事件の原因だと言っただけのことだったのだ。

後で分かったことだが、皆は僕のこの暗号を発見したにも関わらず、誰も僕の意図に気がつかなかったのだとか。暗号は分かりやすいものにするに限るということを僕はこのことから学んだ。

で、その後僕がどうなったのかと言うと、まあ、なんとなく想像は付くだろうけど、僕はこの後にセレナ達が侵入した、あの『研究所』とかいう建物に連れ込まれた。そしてそこで、中から脱出できないような部屋に無理やりぶち込まれたのだった。

「というわけだ。しばらくこの部屋で大人しくしているこつたな」

僕たちを運んできた男は、そう言うなりどこかへ行ってしまった。

僕が閉じ込められた部屋は、小さな窓が一つだけの、薄暗い部屋だった。

この部屋に閉じ込められてから少しすると、僕の体も少しずつ動くようになってきたので、脱出できないかと、いろいろと調べてまわった。しかし、一つしかない重たそうな扉は、しっかりと鍵が閉められ、窓を割って脱出しようとしても、やたらと硬くて丈夫な窓がはまっており、どうあがいても脱出できそうになかった。

グルーアルは何所か別の部屋に連れて行かれてしまったので、僕はひとり孤独に部屋をうろろするしかなかった。

歩きまわるのにも疲れ、僕が壁に寄り掛かって座り込んでいると、不意に扉が開いた。

入ってきたのは、神経質そうな白服の男だった。彼は、手に持った盆を扉のすぐそばに置くと、さっさと扉を閉めて行ってしまった。あまりにあつという間のことで、僕は脱出を試みることにすらでき

なかった。

その盆には、質素な食べ物が載せられていた。

冷え切った食べ物を、一人静かに食べながら、僕はどうしたらいいのか考えていたが、それこそ次に扉が開いたときに強行突破するしかないだろうという、あまりに心許ない案しか思い浮かばなかった。

それで簡単に脱出されるような場所に閉じ込めたりしないだろうなと思いつつ、扉の近くで待ち構えていると、ほどなくして、再び扉が開いた。

僕は勢い良く部屋を飛び出し、扉を開けた白服の男を突き飛ばして脱出しようとした。ところが、案の定というか、部屋の周りに結界が張られていて、部屋の外に引かれた白線に僕が近づくと、体中から力が抜けていって、白線をまたぐ前に後ろから追ってきた男に取り押さえられてしまった。どうやら何か良からぬものを僕の体内に入れられてしまったようだ。男は白線に近づいても、全く苦しそうな様子はなく、白線付近ではまともにやりあうことができなかった。念の入ったことに、魔法すら、上手く使うことができないようになっていたのだ。

「無駄だ無駄だ。あんたはここを脱出できない。この部屋で大人しく待ってな」

「……僕を閉じ込めてどうするつもりだよ」

僕が悔し紛れに言っていると、律儀にも質問に答えてくれた。

「ああ、ちよつとな、良からぬ物を見られた可能性があるんだな。

解放するわけにはいかないんだわ。まあ、安心しな。何も口封じのためだと言って、無駄死にさせたりはしないからよ。あんたは、あれだ、我らが実験の栄誉ある被験者にしてやるからよ。魔獣を全滅させるための一大実験だ。あんたもサプレサーなら、本望だろう？」

「実験……？」

「ああ、そうさ。我々は秘密裏にだな、素晴らしい古代魔法を復活させようとしているのさ。人間を無期限に強化する魔法。上手くい

けば、それこそ、誰でも一人で魔王と十分に渡り合えるようになるはずなんだ。まあ、今のところは、そこそこ強いつて程度の強化だな。それでも無期限で強化されるから、魔力の継続的な消耗もないし、並の強化魔法よりはるかに強いぞ」

「無期限で……、そんなの聞いたことが無いや。大体そんなに素晴らしい魔法なら、なんで秘密裏にやっているんだよ。堂々とやれば、予算も支給されるだろうに」

「それがな、この実験を良く思わない人間が多いんだよ。倫理がどうのとか言っちゃってさ、そんなこと言ってる場合でないっての。魔王が五匹もいるんだぜ。未だかつて、一つの時代に四匹以上の魔王が君臨していたことなんてあったか？この緊急事態に、何のんきなこと言ってるんだよ」

どうやら相当おしゃべり好きなようで、その後も彼らがどんな実験をしているのか、やたらと詳しく教えてくれた。僕が囚人であることを忘れていたのではないだろうか？

その男が言うことには、彼ら研究グループは、大昔に発明された今は無き、人を魔王に変える魔法を研究しているらしい。魔王に変わっても頭の中は人のままだから、世に君臨する魔王と戦うことができるのだそうだ。しかし、魔王になってしまうと、どうしても考え方が魔王のそれに近くなってしまうから、魔王化させた人を確実にコントロールする魔法も同時に研究しているのだとか。今のところは、魔王よりは幾分か低級な魔獣にしか変えることはできないないうのだが、人を完全にコントロールするのは、人々が反対するのも良く分かる。自分が人に操られて、自分の意思で動けないのだとしたら、それ程恐ろしいこともないだろう。少なくとも僕は、そんなのはまっぴらごめんだった。

しかし、いくら僕が嫌だと言っても、今や囚われの身、僕の意見は尊重されるはずもなく、その男は最後に、

「多分明日にでもあんたを使って実験が行われるだろうから、楽しみに待ってな！」

と言が残して部屋を後にした。

——結局何しに来たんだよ。

十二話（前書き）

セレナ視点に戻りました。

十二話

「バシッ」

何の装飾もない石造りの壁に、爽快な音が響き渡った。

私は失いかけていた意識が急に戻ってくるのを感じた。私の首を絞めていた力が無くなり、体に自由が戻ってきた。

何が起こったのか、つい先ほどまで私の首を絞めていた男が三メートル程吹き飛ばされていたのだ。

見ると、レイやウィルと戦っていた敵も、同様に吹き飛ばされていた。服が濡れていたので、おそらく水の魔法を食らったのだろう。勿論、私が水の魔法を放ったわけではない。

魔法を放ったのは、ラルクだった。

扉の前で、肩で息をしながら、さらに新たな呪文を紡いでいた。

さらに良く見ると、ヘイドとシリアまでもが、そこにいた。三人とも、息を切らせているものの、しっかりと呪文を詠唱している。

そこで私は我に返り、起き上がって襲ってこようとしていた黒服の男へ武器を振るった。

どうしてあの三人がここにいるのかを聞く暇もなく、私達は部屋をいっぱい使って戦った。

今度は黒服の男と私達のメンバーの数は同じ、六対六。しかし白服の奴らも黙って立っている訳ではなかった。

私達が少しでも黒服の男達と距離を置こうものなら、すぐさま魔法の攻撃が飛んできたし、それでなくても、黒服の男達を様々な方法で援護してきた。

シリアは接近戦ができない上に、攻撃魔法も使わないので、私はシリアと組んで黒服の男を二人相手取った。

シリアの援護魔法は常にタイミング良く、白服の男達の妨害も上手くかわしながら、私を援護してくれたので、私は二人を相手に十分以上にやりあえた。

さしたる時間もかからずに、二人の男のうち、一人を私の剣が貫いた。

人を切る嫌な感覚が私の腕に伝わってきたが、今まで無数のヒト型の魔獣と戦ってきた私は、いまさらそんなことを気にしたりはしなかった。

私の敵は残り一人だけ。

このままなら押し切れる。

私がそう確信した時、ふとラルクの姿が視界に入った。

彼もまた、黒服の男相手に優勢に戦いを進めているように見えた。黒服の男は、体中に切りつけられた跡があつたし、対するにラルクの方はほとんど無傷で、動きも鈍っていなかった。しかし、なぜかその表情は硬く、攻め方に余裕が感じられなかった。

私がそのことをいぶかしんだ、丁度その時、黒服の男が私と大きく距離をとった。同時に白服の男達の攻撃魔法が放たれる。

私が避けきれないものは、シリアが上手く逸らしたり、防いだりしてくれるので、すぐに私は男との距離を詰めた。

男が完全にはかわし切れない軌道に攻撃を放つ。これを繰り返していけば、いずれ男は力尽きる……。

そう思つて放った私の攻撃は、男の手によつて止められた。かわすでも、腕輪で弾くでもなく、止められた。

「な……………」

私の攻撃は、男の手によつて、しっかりと止められていたのだつた。そればかりか、しっかりと掴まれて、引き抜くことすらできなかった。切れ味抜群の、鋭い剣先が、男の手によつて掴まれていたのだ。

「一体どういふ……………」

呟きかけて、私は見てしまった。男の異常に発達した爪を。弱弱い光を反射して、ギラギラと光っている、魔獣の爪。

人にあるまじき毒々しさをもった、恐怖を引き起こさせる、それはまさしく、凶器であつた。

男は剣を掴んでいない方の、空いている手を振りかぶって、私に向かって振り下ろした。

とっさに剣を放して飛びのいた私は、しかしよけきれずに肩を軽く挟まれた。

まるで水面に手をつ突っ込んだかのように、男の爪はいともたやすく私の体にくいこみ、引き裂いた。

信じられないくらいの鋭さに、思わずひるんでしまった。シリアがとっさに魔法を放たなければ、そのままやられていたかもしれない。

シリアの放った光の帯が、男の動きをわずかに鈍らせて、私はかろうじて攻撃をよけることができた。

しかし、武器を失った私は、男の猛攻を防ぐことができず、肩の傷も相まって、すぐにやられてしまった。

かわし切れなかった敵の攻撃が、私の足を引き裂き、自分の体重を支えきれなくなった私は、その場に崩れ落ちた。出血も酷く、意識を保つのでさえやつとといった私の様子に、止めを刺そうとした男は、横合いから放たれた稲妻に黒焦げにされた。

雷の攻撃魔法を放ったのは、シリアだった。

シリアが今まで攻撃魔法を使っているところを見たことが無かった私は、思わず目を疑ってしまった。シリアが使ったのは、どう見ても、blankの攻撃魔法。私の魔法よりも強かった。

攻撃を受けた男の方は、すっかり黒焦げになり、再起不能、確実に死んでいた。

しかし、シリアもまた、顔面蒼白。多分、大量に出血している私よりも青白い顔をしていただろうと思うほどだった。

なぜシリアが震えているのか、この時私は分からなかった。

サプレサーなら、ヒト型の魔獣や、人に変身した魔獣と戦うときに躊躇しないように、精神を強く持つ訓練を受けているはずだから、多分相手を殺したことは無いのではと思うのだが、シリアのやさしい人柄ならいくら訓練を受けていても、恐ろしいものは恐ろしい

のかなどと、はつきりしない頭で考えていたのだが、どうもそれだけではないようなくらい、シリアの震え方は酷かった。

しかし、いつまでも震えている訳にもいかなかった。男を二人とも倒してしまっただために、私達は白服の男達の絶好の的になってしまったのだった。

四人の白服の男どもの内、三人が一斉に魔法を放ってきた。残りの一人はラルク達にちよっかいを出していた。

シリアはとっさに防御魔法を唱えたが、私達二人を完全に守るのは、かなり無理があった。

抜けてきた攻撃が、私達に無視できないダメージを与えた。

私は動くことはできないので、魔法でシリアを援護するしかなかった。

私は例の如く、大量の水を召還して、守りにあてがった。

私が敵の攻撃をできる限り抑えている間に、シリアが新たな攻撃魔法を唱えた。

「code:4528c 雷神の怒りよ……、天より来たれ」

なんとcランクの魔法。詠唱の声は震えて、それはそれは酷いものだったが、それでもイメージは完璧だったらしい。魔法はcランクの名に恥じない凄まじい威力を見せ、部屋全体を強烈な光で照らした。

あまりの光の強さに、私はしばらく何も見えなくなったが、敵の悲鳴らしきものが反響していたのは今でも忘れることができない。まさに圧倒的な威力だった。

しかし、事はそう簡単にはいかなかった。

シリアの魔法は、確かに白服の男四人を確実に仕留めたが、黒服の男がまだ四人も残っていた。いつの間にか、四人全員が、異様に長い爪をぎらつかせて戦っていて、ラルク以外の三人は、既にやられる寸前だったのだ。

シリアは強烈な魔法を使った反動で、その場にうずくまっていたし、ラルクは相手を何とか追い詰めるところまでいっていたが、他

の三人の黒服の男達が一斉に向かってきたので、そうすると最早ラルクにも勝ち目はなかった。

その時レイ達は既に戦闘不能なくらいに痛めつけられ、最早私達の全滅は必死かと思われた。

しかし、私達の強運は、奇跡を招いた。

教頭の登場である。

どこかに出かけていたはずの教頭が、男達がラルクに止めを刺そうとしたまさにその時に現れて、入口から狙い違わず光の矢で串刺しにしたのであった（狙いが少しでも狂っていたらラルクが串刺しになっていただろう）。

いつか何所かでラルクがオーガにやられかけていた時のように、教頭は見事にラルクが死ぬのを阻止し、なおかつ一人で敵全員を相手取って戦い始めた。

勝負はあつという間についた。勿論教頭の勝利で。

強力な光と闇の魔法を使って、手早く敵を全滅させた教頭は、すぐさま私達に応急処置を施した。どうやら治療の方はあまり得意でないらしい。やたらな魔力を消費している割には、シリアの治療魔法の方が効果が遥かに高い気がしたが、治療してもらっている身でそんなことは言えるはずもなく、私はただ黙って教頭の治療を受けた。

私達全員の治療が終わると、教頭は何も言わずに部屋から出て行ってしまった。

「あれ……………」

私達がどうしたものか測りかねていると、十分ほどして、教頭が戻ってきた。その手にはグルーアルと、その他に白服の男が一人と、黒服の男が一人。いずれも瀕死状態だった。

「いったい何を……………」

死にかけている男達に代わって、私が疑問の声を上げると、教頭は、

「黙って見ておけ」

とだけ言つて、男達を床に降ろした。

グルーアルまでもが、瀕死の様子であることに、何か嫌な予感があったが、何か言える空気でも無かったので、私は黙って見ていることにした。

それからのことは、あまり思い出したくない。

なんと、教頭は、男達を拷問にかけたのだ。

筆舌に尽くしがたい方法でもって、男達から情報を聞き出すという、非人的な方法を平然と始めようとする教頭を、私は必死で止めようとしたが、そんなことを聞く教頭ではなかった。

拷問の手がグルーアルにまで及ぼうとしたところで、ラルクが必死に教頭を説得して、何とかグルーアルは教頭の魔の手から逃れた。あのラルクの様子を見るにグルーアルは悪い奴では無かったのだらうと推測できたから、私もほっとした。

拷問をしている時の教頭の迫力を、私は生涯忘れないだろう。

十三話

拷問の憂き目にあつた男が顔面蒼白で語ったことには、この研究所は元々、対魔獣用の強力な魔法を開発するために建てられた研究施設だつたらしい。

しかし、その研究が、遙か昔に封印された危険な魔法に及ぶようになったために、政府が研究打ち切りの命を下したのだとか。

納得のいかなかった研究者達は、希望者だけがこつそりと集まり、取り壊されることなく放置されていた研究施設を勝手に使つて研究をしていたらしい。

最初は禁断の呪文と呼ばれる、かつて封印された魔法を研究するだけにとどまっていたのだが、いつからか、それでは物足りなくなり、過剰な人体実験にまで手を出すようになったらしい。そのモルモットには、魔獣の被害に合つて故郷を追われた人々をさらつて使つていたのだとか。

グルーアルも、他の黒服の男も、ほとんどがそういった経緯でモルモットにされた人々で、彼らは皆、魔獣化の魔法の実験に使われていたらしい。なかでもグルーアルはごく最近にモルモットにされたのだが、グルーアルが研究員達の予想を大きく上回る力を手に入れたしまったために、精神操作の魔法が上手く効かず、その異常な筋力に任せて研究所を飛び出してしまったらしい。

その後、研究員達は必死にグルーアルを探したものの、グルーアルはあのやたらと広い森に逃げ込んでしまったために搜索は難航し、しかし幸運にも人目に付かない森の何所かに行つてしまったので、そのまま誰にも発見されないことを祈つて搜索は中断されたらしい。そうやってあきらめていた折に、偶然グルーアルがラルクと現れ、しかも記憶を失っているようだったので、そのまま再びとらえて研究を続けようとしたというのが、事の顛末だつたようだ。

「でもどうしてシリアとヘイドがここに？」

ラルクが聞くと、

「なんだか嫌な予感がして……、私達だけずっと隠れ家にいると、不安で仕方がなかったんだもの」

どうやら、シリアの直感？によってここに来ることが決まったらしい。その時に、教頭に事の次第を告げる手紙を残してきたのだとか。

教頭はと言うと、隠れ家に帰ってきたと思ったら私達全員がおらず、シリアの手紙が机に置かれている事に気がつき、そこから全速力で走りぬけてきたらしい。なんでもここの研究所のことはかねてから知っており、良くない噂も沢山聞いていたので、ラルク達がゼルメスに行って行方不明になったと聞いたときに大体のことは予想がついたらしい。

「何の準備もせずに敵の本拠地に乗り込むやつが何所にいるかつ。お前達の実力でそんなことをしたらやられるにきまつておるだろうがつ」

珍しく教頭が大声で怒鳴り、それまで展開されていた拷問の光景と相まって、私達は本当に生きた心地がしなかった。

「ところで先生、この後どうしますか？」

あれだけ恐ろしい迫力で怒鳴られた後なのに、ウィルはけろっとして聞いた。——ある意味大物だと思う。

「まずはこの研究所をどうにかせねばな。どうせ兵士の類は魔獣討伐でてんやわんやで、こんなぼろくさい研究所の事なんかかまつていられんだろう。どうする。周りに被害が及ばないように結界で囲って一気に崩すか？」

「そ………そんな………」

哀れな研究員の悲鳴にも近い小さな抗議の声は、教頭の一睨みで黙らせられた。

結局、ただ破壊してしまうのは勿体無いというウィルの意見によって、先に使えそうな物を勝手にいただいでいくことに決まった。

「……泥棒以外のなものでもないよね………」

ラルクが呟いていたが、知ったことではない。人を攫ったりしているようなやつらにくれてやる慈悲は持ち合わせていない。

あらかた物色が終わったところで、一応研究員達を兵士につきだして、私達は適当な宿に泊まっていくことになった。

私達のけがも酷かったので、宿に着いたらしつかり治療をしようということなのだが、最近は医者なんてのは需要が多すぎてこんなちよつとした街にはおらず、私達は結局シリアの治療に頼るしかなかった。

治療をしながら、シリアは自分もレジスタンスに入ると言いだした。

「私でも出来ることはあるんじゃないかと思って……。敵と戦うことはできなくても、こうやって治療はできるんだし、他にも色々と手伝えることはあると思う。何も直接戦うだけがサプレサーじゃないもの」

「戦えないって……、シリアは十分戦ってたじゃない。私でもあんなに強い魔法使えないわよ」

私はシリアによって放たれたcランクの魔法の威力を思い出しながら言った。

しかし、シリアは首を横に振るだけで、何も言おうとしなかった。

——何か言えないような事でもあるのだろうか、この年でcランクの魔法を扱えるのは、普通じゃない。しかし、攻撃魔法を唱えている時のシリアは、それ以上に普通じゃなかった。まるで何かに脅えているように。力を抑えようとしているかのような呪文の唱え方。きつと口に出したくない事情があるのだろうと思って、私はそれ以上深くは追求しなかった。

「そういえば、ヘイドはどうすんのよ。これで私達、ヘイド以外は全員レジスタンスのメンバーになっちゃったんじゃない？」

「……………、僕も手伝いだけなら入れるけど、戦うことはできそうにないよ」

「別にいいわよ。名目だけでも入っておけば、やっぱり一人だけ不参加ってのは精神衛生的に良くないわよ」

「それにヘイドなら武器の魔法付加とかできるんじゃないか？それで充分だろ」

レイが傷の手当てをしてもらいながら、ぼそりと言った。

「よし。じゃあこれで今日から隠れ家のメンバー全員がレジスタンスだね」

「でも、グルーアルはどうすんだよ」

「え？と言うかグルーアルって隠れ家のメンバーなの？」

「セレナ……、それはあんまりじゃねえか」

「だって、とりあえず何所の誰かも分かったんだし、もう隠れ家にいる必要もないじゃない」

「でもよ、結局研究所は教頭が粉碎しちまったじゃねえか。結局帰るところもねえんだしよ、実力も十分なんだから、レジスタンスのメンバーに加えちまった方がいんじゃないか」

「教頭がなんて言うかしらね……」

「大丈夫だろ。これで素性も知れたんだし、これでもう疑う必要もねえだろ」

レイが丁度そう言った時、部屋の扉が開いた。

「お前達は気安く人を信じすぎだ」

「げっ、教頭……」

『げっ』て……。

「確かに今回グルーアルは敵じゃなかったが、魔獣が人に化けていることだってあるんだぞ。大体、なんで絶対安全だと言われていた学院が落ちたと思う？」

「なんでって……、魔獣の強襲にあったからじゃないのかよ」

「そう簡単に魔獣に侵入を許すような守りでは無かった」

「まあ、そりゃ、学院の守りが丈夫だってことは聞いてはいたけどよ、実際にやられたんじゃないか」

「学院の鍵の一部を預かる教師が、愚かにも魔獣にだまされたのだ。」

奴が魔獣を学院に招き入れるような真似さえしなければ、少なくともあれほどすぐに学院が陥落することは無かっただろう。魔法のエキスパートたる、学院の教師までもが、魔獣にだまされたのだ。お前らなど、魔獣の格好の餌食でしかない」

教頭がやたらに人間不信だと思っていたら、そんなことがあったのか。

学院で事件が起きて以来、ずっと隠れ家にいたから、学院での事件の顛末などさっぱり知らなかった。今度街で新聞でも買って読もうかな……。

そんなことを考えながら、私は長かった一日の疲れを癒すべく、深い眠りについた。

間章その2（前書き）

前話で第二章が完結しました。

すでにストックが尽きた状態で書き続けること数カ月……
そろそろ厳しくなってきました………

間章その2

「対魔獣用人間兵器……」

ロッドを携えた魔法使いの女性が、目を伏せながら呟いた。

「魔獣の侵略が酷くなると、必ずと言ってよいほど、研究される、残酷な手段ね……」

「ある意味では最も合理的な手段だが、人はそういうときに、合理的な手段をとれないものだ」

弓を傍らに置いて、若い男が訳知り顔で言った。

「ってかあんた、人間兵器を使った方がいいと思う訳？」

「そりゃあ、人類が全滅するぐらいなら、人間兵器でも何でも使うしかないだろうよ。数人の犠牲で人類が救われるんなら、その方がいいだろうよ」

「ちょっとだれか、こいつに道德というものを教えてやってよ」

狭い石室に、冒険者達が言いあう声が木霊する。

「二人ともとりあえず黙つとけ、耳にこたえる」

「そ、それはそうと、そのあとは、あなた方はどうしたんだ」

盗賊^{シーフ}の男が、ラルクとセレナに聞いた。

「そのあとは、しばらくこれと言った事件も起こらなかった。先生の機嫌もいつの間にか治って、僕達の訓練がいよいよ本格的になっていったのさ」

ラルクは当時をなつかしむように語った。

「そして冬がやってきた。私達の隠れ家は、雪が降る地域に建っていたから、冬の内には、私達は魔王と戦う準備を進めた。そのころには魔獣の侵略も凄いことになっていて、ついにはゼルメスまでもが占領されてしまった。しかし、私達はただひたすらに耐えて、行動を起こす機会をうかがっていた。チャンスがやってきたのは、次の春、ほとんど雪が溶けて、道が通れるようになったころだったわ……」

三章・永遠の戦い（前書き）

すみません

……先週も更新できませんでしたね。
今週は何とか更新できました。

三章・永遠の戦い

春がやってきた。

雪が解け、長らく隠れていた草木が顔を出し、心なしか、太陽がいつもより明るく輝いているように見えた。

今頃は、学院の中庭で奇妙な植物たちが奇抜に輝いていることだろう……

そんなことを思いながら、森に生えた小さなキノコを摘み取っていると、不意に背後から声がした。

「なーに考えてんだよ。ラルク」

レイが手に持った籠をぶらぶらさせて歩いてきた。

「うん？今頃学院はどうなっているのかなと思って」

「学院か……、懐かしいなあ」

レイはめんどくさそうに果実を摘み取り、籠に入れながら言った。
「もうあれからどれくらい経ったんだろう？もうずいぶん昔のことに感じるね……」

「実際にずいぶん前のことだと思うよ。あれから先生の訓練がどれほど続いたって……、すっかり日課になっちまったが、辛く長い日々だった」

「まあ、先生の訓練はかなり無茶を含んでたからね……」

そう言いながら、僕は学院を出てから経った月日を計算していた。確か、春、僕達が二年生になったすぐ後に学院が襲われたわけだから、もうあれから一年近くたつことになる。しかし逆にいえば、オーガとさえまともに戦えなかった僕達が、たった一年修行を積んだだけで魔王と戦いに行こうとしているということになる。

「勝てるんだろうか……」

「今更そんなこと言ってどうするよ。教頭を信じるしかねえだろ」
僕が思わず呟くと、レイがあっけからんと言った。

「まあ、そうだね……、別に僕らが魔王と直接やりあうわけじゃな

いもんね。多分」

「そうだ……、結局僕たちは先生の補佐をするにすぎない。現に修行だって魔王の城にいるであろう魔獣を相手にすることを想定したものだ。そして十分それが可能なくらいには……成長した。」

「ま、教頭だって、素直に信じていいのか怪しいくらいに胡散臭いかな。しかしそんなこと言っても仕方ねえ。魔王を倒すなら、あれくらいの奴がいらないことにはどうにもならんだろうしな。今の時代の最後の希望かもしれねえぞ。案外」

「そうね。私達が失敗したら、もうどうなるか……、あまり想像したくないわ」

近くで薪を集めていたセレナが話に入ってきた。

「少なくとも……、有力視されているやつら全員が組んで戦いに行つたところで、ちょっと以上にきついだろうな。それに比べりゃ、教頭の実力は異常だろうよ」

「私達が少しでも役に立てればいいんだけど……」

「つつか教頭が魔王を倒す前に死なないといいんだけど……」

「そうだね……僕も死にたくはないや」

「何二人して不吉なこと言ってるのよ。魔王以外の雑魚共にやられる気なんて毛頭ないわよ」

「セレナ……、相変わらず強気だね……」

「ラルクが弱気なのよ。あんたも実力はあるんだから、もっと自信持ちなよ」

「そりやどうも」

僕らはそんなことを言いながら、食材の調達を終えて、野営地に行つて行つた。

僕らはこの時、既に魔王討伐を目指して森の中にいた。

森とは言つても、隠れ家の周りにあつた森ではなく、魔王の住処となつている城がある森である。のんびりおしゃべりなどしながら食物採集をしていたが、決して安全とは言えず、むしろ強力な魔獣がうようよという危険な森だった。

実際に、食料採集中にも、何度もオーガやリザードマンやら、上級の魔獣に遭遇していた。だからこうやって、僕たちは固まって作業をしていた。

本日何度出くわしたかわからない、どす黒いウルフを黒焦げにしながら、野営地へと戻った。

セレナが言った通り、今の僕たちは一年前とは全く違い、そこらのよわつちい魔獣にやられる程弱くはない。サタンにでも出くわさない限り、おいそれと殺されることは無いだろう。

「まったく、よく一年でここまで成長したもんだ」

同じことを思ったのか、近くでレイが呟いていた。

その後シリアが僕達のとってきた食材で鍋物を作り、僕たちは魔獣を集めないように小さめの火を焚きながら質素な食事をとった。

「明日には魔王の根城にたどり着くだろう。今日の内に英気を養っておけ。下手をすればそのまま明日戦いになるからな」

食事の最中、先生が僕達に警告した。

ここまで余りにもあっさり来てしまった。

雪が溶けて、道が使えるようになったと思ったら、いきなり先生が魔王を倒しに隠れ家を出ると言い出し、そのままあれよあれよと言う間に魔王の根城のすぐ近くまで来てしまった。正直信じられない。よもやこの年で魔王と戦いに行こうとすることになるうとは。

そんな僕の感慨をよそに、食事は肅々と進んでゆき、いつの間にか日が沈み、僕たちはいそいそと毛布を取り出し、先生の張った境界のなかで横になった。

普段口数の多いレイも、この日ばかりは物静かだった。

何か喋るにも、皆自然と声を低めて喋っていた。

——最後の夜になるかもしれない——

ふとそんなことが頭をよぎり、嫌な想像が無数に生まれてゆくのを押し留め、僕は眠りに着こうとしたが、やはり眠れない。

他のみんなも、何度も寝返りを打ったり、毛布を引っ張ったりと、さっぱり眠れない様子だった。

やはりみんな緊張していたのだろう。

先生も、この日一日は珍しく表情が硬かったように思えた。森を進むペースも遅かったように思える。

『下手を打てば、五匹の魔王全員と戦う羽目になるかもしれない』

出発前、先生が言った言葉が思い出された。

先生によると、魔王達は転移魔法で、お互いの城を行き来できるらしい。転移魔法なんて、遙か昔に滅びて以来、すっかり失われたものだと思っていた僕達は、半信半疑だったが、もしそれが本当なら、魔王をその場で仕留めなければ、他の魔王全員が呼ばれてしまうことになってしまう。はっきり言って勝ち目はない。

今僕達が倒そうとしているのは、当代五匹の魔王の中では最弱だと先生が断言した、南の魔王である。中央の魔王などは、呼ばれたが最後、先生でも勝ち目はないらしい。

現に、今五匹もの魔王が同時に存在している原因の大半は、中央の魔王の賢さによると言われている。あの魔王が、次々と失われた魔法を復活させ、魔王同士の連携を強固にするという異例の事態を引き起こしたために、僕達サプレサーは魔王を討伐出来なくなったそう。

僕達の役目は、魔王の情報網を錯乱させて、他の魔王がやってくるのを阻止すること。そのために、先生が驚くほど綿密な計画を立て、僕達に教えてくれた。

なぜ先生があれほど魔王達について詳しくったのか、巷に出回っている情報とは比べ物にならないほど、先生は魔王達のことを知っていた。根城の構造、五匹の魔王達の習性、得意な魔法の分野……。おそらく先生は昔魔王と戦ったことがあるのだろう。そうでもなければ、あれほどの情報が集まるとは思えない。

そんなことを考えていた僕は、いつの間にか瞼が合わさり、浅い眠りにについていた……………。

三章・永遠の戦い（後書き）

来週は更新できそうにないです……すみません。
土日とも大会があったりするので。

十五話

天にも届かんばかりの巨大な樹木が、鬱蒼と生い茂っていた。

まだ春だと言うのに、競い合うようにして生えている無数の葉は、貪欲に太陽の光を貪り、地上に一切の光を届かせまいとしていた。

流石に魔王の住処だけあって、魔獣の人口密度？がやたらと高く、未だ正午にもならないというのに、朝から倒した魔獣の数は三桁にも上ろうかと言うほどだった。

「はあっ！」

僕が気合とともに狼モドキを切り倒し、僕らは尚も奥深く、魔王がいるであろう樹木のドームの中心地を目指して歩いていった。

のんびりしている暇は無かった。

僕たちは何としても、魔王が異変に気がつくまでに魔王の元へ辿り着き、他の魔王が呼ばれるよりも早く魔王の息の根を止めなければならなかったのだ。

万が一の時のために、ヘイドとグルーアルが野営地に残り、転移魔法で他の魔王達がやってきた兆候が現れたら、僕達に知らせる仕組みになっていた。

この時は、まだ、ヘイドから渡された魔法のペンダントは形を保っていた。

ウィルは時々風を操作して、僕達の臭いを誤魔化し、魔獣や魔王に気づかれないようにしていた。

レイは強化の魔法を全員にかけて、少しでも早く進めるようにし、僕は襲ってくる魔獣たちを手早く始末していた。

セレナも僕と同様に、襲ってくる魔獣の対処。先生はと言うと、魔王との直接対決のために力を温存していた。

シリアは、僕達の疲労を緩和する呪文をほとんどひっきりなしに唱えていた。

そんな状態で、僕達は静かに魔王の元へと向かっていた。

襲ってくる敵の対処にも慣れてくると、僕には別のことを考える余裕が生まれてきた。

とはいっても、とりたてて考えることもない。

魔王との対決のことを考えても緊張するだけなので、なるべく考えないようにしていた僕は、ここまでの道程を回想しようとして……、驚くほどあっさりと来てしまったと改めて思った。

僕達の隠れ家から百キロを超える遠方までやってきたというのに、何もかもが先生の予定通りに運び、道中事件に遭遇することもなく出会った魔獣もサタンレベルのやつはおらず、せいぜいが単体のオーガで、僕たちは特に油断して危険な目にあうこともなく、無難に倒して、無難に進んできてしまった。

これはひよつとすると凄いことなんじゃないだろうか？

普通、魔王の住処に侵入をするとなっても、それ以前に何かしらのトラブルに巻き込まれたり、なかなかうまくいかないものなのだと僕は聞いたことがあった。

ただでさえ、魔王の住処の近くには魔獣も多く、未確認の魔獣に出くわすことも少なくないのに、加えて、魔獣の密集地に生じる独特の負のオーラというか、空気と言った方が、人間の判断力を鈍らせたり、ストレスを与えたりして、不注意による思わぬ事故を引き起こさせたりすると言う話は良く耳にする。

それなのに、僕らは誰一人として、これといったトラブルも起こすことなく、魔王の住処の奥深くまで来てしまったのだ。むしろ何も起こらな過ぎで、印象にほとんど残らなかつたくらいだった。

「ラルクっ、目エ覚ませえ」

後ろから、レイにとつかれた。

「もうすぐ魔王とご対面かもしれないとよ。氣引き締めていこうぜっ！」

「もうそんなところまで来ちゃったのか……、何も無さ過ぎて正直拍子抜けだね」

「まあ、いいんじゃないか？ どうせ本番はここからだしよ。それに

こんなにうまくいったら、本番も案外あっさり言っちゃうかも知れねえぞ」

「そうよ。何にせよ油断している場合じゃないわよ。ラルク」

セレナも表情がいつになく真剣だった。

僕も再び気を引き締めて、周囲の気配を探ることにした。

と、その時、僕達の周囲に生えていた木々が、突然震えだした。

「強力な風の魔法だ。魔王の魔法だよ！」

ウィルが叫んだ。

直後、凄まじい轟音を立てて、僕達の周囲の木が一斉に僕らの方に倒れてきた。

「よけろっ！」

「無理だっ！」

レイと僕がわずかな時間差で叫んだ。

レイがとつさに避けようとしたが、今まで木の周りでしか吹いていなかった強風が、突如僕達の周りで吹き始めたのだ。

余りの風の強さに、僕たちはまともに立っていらなかった。これでは木々を避けることは出来そうもない。

「やばいっ！」

レイが叫んだのとほぼ同時に、先生の魔法が発動された。

先生が発動した強力な闇の魔法は、先生の周りから四方八方に放出され、僕達に襲いかかってきていた木だけを的確に飲み込んだ。

飲み込まれた木は跡かたもなく消えていた。

余りの威力に、僕達は逆に動揺してしまっただが、目の前に二つ頭の狼が降ってきたことによって、我に返った。

「グルルルルるるる……」

獣のような唸り声をあげていたそれは、余り知性的とは思えない雰囲気を感じ、口からは大量の唾液を滴らせていたが、気配からして、魔王に間違い無かった。

とつさに僕たちは飛びのいた。

そんな僕達を逃がすまいとして、魔王は一番遅れたシリアに飛び

かかった。

しかし、先生が新たに発動した魔法によって、魔王の行く手が塞がれた。

そのすきに僕たちは十分に距離をとり、すぐさまシリアが呪文を唱えた。

「code：9342b・何者も逃すまい。そこにあるものすべてを捉えよ」

ほぼ同時にセレナも魔法を唱えた。

「code：9110a・力を固めよ。そこにあるが如く、杵よ固まれ」

シリアが教頭と魔王とをまとめて結界の中に閉じ込め、セレナがすぐさまそれを強化。二人は結界の維持に専念し、後は僕とレイとウィルが、結界に近寄ってきたり、セレナ達を攻撃しようとする魔獣をたたけば良い。

シリアとセレナはひっきりなしに魔法を追加し、補強していた。

これで結界の中と外の世界は、ほぼ完全に分離されたはずだ。結界の中の状況は外にはほとんど漏れてこない。事実結界の中からの光さえもが遮断され始め、結界が真っ黒に近づいてきた。音・光・魔法の完全な遮断。セレナ達はただそれだけに集中し、中のことは完全に教頭先生に任せる。

こうなると中の様子は見えないので、僕たちはただひたすらに先生の勝利を祈りながら、自分の役目を果たすしかない。あくまで僕たちは脇役なのだ。

僕が大きく深呼吸して、近くから集まってきた魔獣たちを睨みつけた時、黒く染まった結界の中では、実力において僕達の遥か高みにいる者たちの戦いが始まろうとしていた……。

十六話（前書き）

いよいよ終わりが見えてきました。
来月中には終わるかな？

十六話

中で何があったのだろうか。

続々と集まってくる魔獣は、最初のころよりも明らかに増えていた。

どの魔獣も、明らかに結界をめざしてやってきていた。

セレナ達の結界の効果を突き抜け、結界内部から魔獣を呼び寄せる魔法が使われたのだろうか。魔獣の集まり方は尋常でなくなってきた。そこらにある木の本数よりも遥かに多い数の魔獣が、一斉にセレナ達の結界を目指して攻めたててきていた。

ウィルは既に息が上がっていたし、かく言う僕もかなり厳しいなってきた。僕の肺は、より多くの酸素を求めて、激しく活動し、それでも酸素が足りなくなってきた。視界がおぼろげになってきていた。足もだんだんということ効かなくなってきた。ウィルが脱落したら、僕も数分と持たないかもしれない。そう思うほどに、激しく動きっぱなしだった。

レイだけは呼吸すら乱れていないが、表情には余裕が無い。明らかに魔法を使わなくなってきた。

「ラルク……、もうそろそろ限界……」

「僕に言われても……」

僕とウィルが小声で弱音を吐きながら、ぎりぎりのところで魔獣が結界に攻撃するのを防いだ。

この時既に十発以上は、魔獣による結界への攻撃を許してしまっていた。セレナ達も相当に厳しいはずだ。

事実、時々結界が揺らぎ、中の音が一部聞こえてきたりしている。結界は内部からの衝撃には強いが、外からの衝撃にはすこぶる弱いのだ。

「ラルクっ、左！」

セレナが呪文詠唱の合間に叫んだ。

見るとオーガが今にもその巨大な棍棒を結界に叩き込もうとしていた。

僕は慌てて飛び出し、呪文を唱える暇すら惜しんで切りかかったが、もとより間に合う様な距離では無かった。

漆黒のドームとなっていた結界が大きくたわみ、叩かれたところから様々な光が漏れだしてきた。

「ああっ！」

シリアが短く悲鳴を上げた。

ずっと閉ざされていた結界が、大きくゆがみ、光を吸収しつくしていた漆黒のドームは、うすい茶色にまでなってしまった。

「くっ、崩れる……」

セレナが絶望の声を上げた。

確かに、この時結界は修復不能なくらいに傾いていたのだ。

それが、空から落ちてきた黒い魔法によって、一瞬にして、すっかり元通りになってしまった。いや、元より強度は上がっていたかもしれない。

「え……？」

真っ黒になり、結界内部の音すら完全に隔離した結界を見て、僕たちは訳が分からず、一瞬呆然となったが、すぐさま別の魔獣が結界を破壊しようとしたので、すぐに我を取り戻した。

そのあとも、何度か攻撃を防ぎ損ねて、結界がダメージを被ったが、明らかに強度が先程までより増していた。

先生は間違いなく結界内で魔王と戦っているはずだし、他に闇の魔法を使える協力者がいるとは思えなかった（黒い魔法は闇の魔法だけの特徴である）。闇の魔法は、基本的に人間は使えないはずなので（なぜだか教頭先生は使えるが）、魔法の発生源がさっぱり不明だった。まさか、そこら辺に先生の同類が来て、援護してくれているのだろうか？

それからどのくらいの間戦っただろうか。

四方から殺到する斧を弾き、或いは逸らし、飛び交う黒い魔法光を必死で避け、自分の愛剣を魔獣の血で黒く染めながら、いつしか僕は時間の感覚を失っていた。

ただ無心に剣を振るう。

生と死の狭間をいくつもぐり抜け、それでも死ぬことなく、敵の数を減らしていった。僕の首筋を魔獣の鋭い牙がかすめた時は、もうだめかと思った。

僕たち三人に対して、敵の数は、十や二十では無い。百を超える魔獣の屍を踏み砕き、むっとするような死臭をこらえながら、新たな敵を、切り裂いてゆく。

結局、僕たちは先生と魔王との一大決戦が終わるまでの間、結界を無事に維持し続けた。そう、戦いが終わったのである。

ウィルが脱落し、僕とレイが倒れかけたところで、不意に結界が内側から破られたのだ。

と言っても、力づくで破られたのではなく、あらかじめ決められていた結界を解く『鍵』のような魔法が内部で唱えられたというだけである。

そしてその『鍵』となる魔法の言葉を知っているのは、僕達と先生だけであった。

つまり、先生は魔王を無事倒したのであった。

なんともあっけない話である。

何十人と言う猛者達が挑み、そのことごとくが返り討ちにあい、ある者はほうほうの体で引き返し、またある者はその命を落としたと言うのに。討伐不可能とまで言われた当代の魔王達五匹のうち、一匹を、先生はわずか数十分の戦いで倒してしまったのである。

しかも結界が開くなり、僕達がさんざん手こずっていた魔獣たちを、ほぼ一瞬で消し去ってしまった。

僕達は安堵のため息をついて、その場に崩れ落ちようとして、そ

ここで僕は先生の表情を見て、猛烈に違和感を感じた。

確かに先生は普段から暗い表情ばかりしているが、なにせこの時は歴史的な快拳を上げたばかりだ。それなのに、この時の先生の表情は、いつもにも増して暗かった。

「不味いことになった」

辺りに残っていた魔獣を蹴散らすなり、先生はそう言った。

「敵は既にほかの魔王を呼んでいたようだ。我々が知らないような魔法で、敵は警戒網を引いていたらしい」

その瞬間、僕の胸元で、光がはじけた。

ずっと形を保っていたペンダントが、跡形もなく消え去ってしまった。

ヘイドが、他の魔王がこの近くにやってきたのに気がついたということだった。

十七話

初めにやってきたのは、東の魔王だった。

ヒト型の魔王だが、身長は二メートルを裕に超え、溢れ出る魔法が黒いオーラとなって体を覆っていた。

南の魔王との戦いの直後では、流石の先生も厳しいのだろう。表情がかなり硬かった。

「逃げ切れると思うなよ。小僧ども。私が一瞬にして消し飛ばしてやるからな……」

くぐもった声で僕達を威嚇する声は、容姿と相まって、僕達に言いようのない恐怖心を引き起こさせた。

「少々調子が悪いからな……、出来れば城でゆっくりと休んでいたかったのだが、同士がやられたというのなら、黙っている訳にもいかないだろう。この私を煩わせるとは……、ガキどもの分際で、許すわけにはいかん」

無駄に長いセリフを終え、東の魔王は高く跳躍した。

僕達を遥か上空から見下ろす位置まで飛び上がり、朗々と呪文を読み上げた。

「code：0544c・炎の海を、我が手より解き放ち、敵を飲み込め」

芝居がかった様子からは想像もできないほど、凄まじい勢いで解き放たれた魔法は、避けることが出来そうもないほど広範囲にわたって炎を巻き起こし、僕らをその内に飲み込んだ。

僕たちは残ったわずかな魔力を振り絞って防御の魔法を唱えたが、それは自分達の体を守るので精一杯だった。結果、密集して生えていた樹木の水分を、強力な火の魔法があつという間に蒸発させて、森は文字通り火の海と化した。

自分の解き放った魔法を満足げに眺めていた魔王の表情が、火が森に燃え移って拡大していく様を見て明らかにこわばってきたのを

見るに、自分の魔法が引き起こす結果をいまいちうまく予想出来ていなかったようだ。……………三流だな。

辺りに煙が充満し、視界がまともに効かなくなり、僕たちは初め右往左往していたが、僕達の位置をすぐさま突き止めた先生が、僕達を捕まえ、全力でその場から逃走を図った。

全身から大量の魔法を放出している魔王の位置は僕達に筒抜けだったが、逆に向こうからはさっぱり僕達が見えていないようだった。おかげで、僕たちは上手く逃げ切ることができそうだった。

しかし、僕達が森から脱出しようと走る最中に、新たな敵がやってきた。

西の魔王である。

四本の腕と二枚の巨大な翼をもつ西の魔王は、やってくるなり東の魔王を罵りつつ、すぐさま魔法を放った。

今度は空から大量の水が落ちてきた。

決して雨とは言えないような、むしろ空そのものが落ちてきたかのような量の水が森全体に降りかかり、一気に森を消火した。

今度は大量に発生した蒸気で視界が塞がれたので、僕たちは見つかることはなかったが、蒸気はあつという間に無くなり、間もなく僕達の姿は白日のもとにさらされてしまうだろうことは容易に想像できた。

「どうしよう……、野営地はもうすぐだろうけど、それじゃあヘイド達を巻き込むだけじゃない……」

シリアが泣きそうな声で言った。

「だけどあいつらを置いて森から出るわけにもいかなえだろが」

「だけど僕達が野営地に着くころには、見つかったちゃうと思うよ」

「すっかり木が焼けて無くなったからね……」

僕が走りながら空を見上げながら言うと、レイも軽く頷き、

「まあ、なんかあいつらは揉めているようだかな」

と言った。確かに、レイの言うとおり、上空では二匹の魔王が睨み合っていた。

「なんかうまくいきすぎている気がするけどね……」

最初、南の魔王との戦いのときは謎の力が僕達の窮地を救い、東の魔王が来たときは魔王自身のミスによって危ういところを逃げ、そして西の魔王がやってきたら今度は東の魔王と争い始め、僕たちは運命の神に相当好かれていたのではないだろうか？

しかし、そんな僕の思考は、北の魔王がやってきたことで打ち切られてしまった。

空から虹色の光とともに現れた北の魔王は、東西の魔王を一瞥し、それから森の方を見て、しばらく目を凝らしていた。その細く、しかし威圧的な眼光は、遠くから見ても分かるほど、鋭く、威圧的だった。

僕たちは今にも見つかるのではないかという強迫観念にかられ始めたが、何とか走り続けて野营地まで退避し、待っていたヘイド達に状況を説明した。

「ということは、中央の魔王以外全ての魔王が来てしまったということか」

グルーアルが感慨深げに呟いたが、正直そんなことをやっている余裕はなかった。

なんと、北の魔王が僕達のことを見つけたのだった。

凄まじい速度で真っ直ぐに僕達の方へ向って飛んで来た北の魔王は、これまた巨大な翼に、鷲のような頭を持ち、ドラゴンのような太くて長い尻尾を持っていた。

「やばい、このままじゃ不味いよ……」

ウィルが叫ぶと、すぐさま先生が指示を出した。

「二手に別れるぞっ！うまくいけばどちらか一方は生き残れる」

「っておい、そりやどっちか一方は確実にさよならじゃねえか」

「そうしなければ全員確実にさよならだ！」

「だろうがなんだろうがあきらめてたまるかよっ」

「あきらめないからこそ生き残る可能性にかけるんだろっ！全員で玉碎などあきらめた奴のことだっ！！」

先生とレイが言い争っているうちにも、北の魔王はどんどん僕達との距離を詰めてきていた。

「時間が無いっ、別れの挨拶は無しだっ」

先生はそう言い放つと、素早く呪文を唱えた。

僕達が気がつくよりも速く発動した魔法は、黒い触手となって僕達を襲い、力ずくで僕達を掴み、その場から百メートル近く引き離した。

その直後、北の魔王が放った魔法が、つい先ほどまで僕達がいた場所を襲った。

その場に残っていたのは、先生一人、僕たちは、僕とセレナとグルーアルが先生から見て北西の方角に、他全員が北東の方角に飛ばされた。

ここから街に行くには、真っ直ぐ北に向かうのが一番早いことは分かっていた。そして、僕達とレイ達との間には南北にわたって巨大な川が流れていた。先生は何としても僕達を二分したかったらしい。

北の魔王の魔法を、凄まじい移動速度でかわした先生は、そのまま強力な魔法を発し、魔王と戦い始めた。ぱつと見では互角に戦っているように見えたが、先の戦いで消耗している先生は、大分不利だろう。心なしか勝負を焦っているように見えた。

しかし僕達がそこに加勢に行っても、邪魔にしかならないのは間違いない。ちらりとレイ達の方を見ると、先生の意向をくんで、真っ直ぐ北を目指して走っていた。

僕達も、軽く頷きあい、すぐに走り出した。目指すはここから十キロ近く北にある、エルミードの街。おそらく、さほど経たずして上空で睨み合っている二匹の魔王達は僕達を追ってくるだろう。そうなったときは、僕たちはさらに二手に分かれるしかない。ここまで来たら、もう決断すること迷ったりはしないだろう。徹底的に合理主義を叩き込まれた僕たちは、いつまでも迷ったりはしない。

おそらく二度とレイ達に会うことはできないのだろうと思いが

ら、四分の一の可能性のために僕たちはひたすらに走った。

十八話

僕達の命運は決まった。

そうやってあきらめざるを得ないくらいに、この時の僕達の状況はよろしくなかった。

追ってきた二匹の魔王。東西の広い地域を治める、僕達には到底かなわないであろう敵が、すぐ目の前に迫っていた。

「少しでも時間を稼いで、せめてシリア達を生かすわよ」

セレナが自分に言い聞かせるように呟いた。この段階で、彼女も生き残ることをあきらめていたのだろう。グルーアルも、僕も、逃げることをあきらめ、魔王達に一矢報いるべく、戦闘態勢に入っていた。もとより僕達が地を駆けるスピードと、魔王達が空を滑空するスピードでは、勝負にならない。

「フフフフフ……、さっきのようにうまく逃げられると思うなよ。この私にかかれば、お前たちなど……」

東の魔王が、いびつな形の口をさらに歪めて僕達を睥睨した。

「そんなことよりも、どういうことだ。さっきよりも随分と人数が減っていないか？北の魔王の奴、殺りすぎだろう？」

「そのようだな。私達が喧嘩をしている間に、彼においしいところを持って行かれたようだ」

どうやらこの二匹の魔王は、レイ達が既に殺されたのだと思っただけにいらしい。僕たちは、あえて本当のことを教えようとはせずに、いかにも悲しみに暮れている風を装った。

「さて、ガキ二人におっさん一人よ、魔王の領地に侵入したからには、それなりの覚悟がきているのだろっな……？」

東の魔王の言葉に、グルーアルが「おっさん……」などと呟いていたが、僕たちはそんなことを気にする余裕はなかった。

「code:1400b・我が意思の支配の下、水よ来たれ」

セレナが真つ先に魔法を唱えた。

「code:9233a・to1400b・塗り替えよ。支配よ我に。世界の全ては我が意のままに……」

東の魔王が素早く魔法を唱えると、セレナの喚よんだ水は瞬く間に消し去られた。やはり僕たちでは勝負にならないのだろうか。

セレナと魔王が魔法を唱えている間に、西の魔王が襲ってきた。

巨大な翼を広げると、僕達とはそもそのサイズが違った。僕達の胴体程もある太くてがっしりとした腕が、真横になぎ払われた。

すぐ後ろでセレナが魔法を唱えていたために、僕たちは避けるわけにはいかず、グルーアルと僕が二人がかりで押しとどめた。グルーアルは既に人ならざる容姿となり、いつか戦った黒服の男達と同様の、人間の枠を超えた筋力を有していたが、それでも防ぎきるのは困難だった。

一撃を受けただけで意識がブラックアウトしそうなくらいの衝撃を受けた僕は、続けて放たれた左下からのアッパーをもろに食らった。

素手での攻撃であつたにもかかわらず、一撃で戦闘不能に近い状態まで追い詰められた僕は、僕と同様に殴り飛ばされたグルーアルを視界に収めていたが、とても援護に回る余力はなかった。

セレナはいつの間に習得していたのか、cランクの中でも割と上位の魔法を放っていたが、それすらも、東の魔王に軽い傷を負わせただけで、逆にセレナが力を使い果たしてその場に倒れこんでしまった。やはりかなり無理をしたのだろう。普通は僕達の年ではcランクの下位の魔法が限界である。

僕もせめて傷だけでも負わせてやろうと思い、油断しまくっていた東の魔王に手持ちの剣を投げつけてやったが、胸を浅く切り裂く程度だった。

絶望的な状況だが、しかし僕は心の何所かで期待していた。何を言われれば、何とも答え難いのだが、僕達はここまでやたらと幸運に恵まれていた。まだ何とかなるかもしれないと思っていたのだった。

実際、救いの手は差し伸べられた。

僕達の存在意義はなんだっただろう。時々、そう思うことがある。

それほどまでに、強者同士の戦いと言うのは、僕達『中途半端な実力者』の介入を許さない。

北の魔王と戦っていたはずの先生が、驚異的な速度で戻ってきたのだった。それも、仲間を連れて。

どうやら先生自身も誰なのかわかっていないようだったが、先生とともに二匹の魔王と対峙しているのは、先生並、下手をすれば先生以上かもしれないというほどの圧倒的強者。二匹の魔王が目に見えて押されていた。僕たちは戦いの余波だけで殺されかねないような、別次元の戦いを見せられた。僕達が一つの呪文を詠唱するのにかかるのと同じくらいの時間で、何十もの魔法が同時に放たれ、それらを的確に見切り、かわし、迎撃してゆく。

強者同士の戦いは、凄まじい速度で展開してゆき、あっという間に勝負がついた。

何の危なげもなく勝利した先生を見ると、僕たちは本当に何か不思議な力が宿っているのではないかとすら思えてきた。——僕たちは運が良すぎだろう。

むしろかなり危険なこぼれ球を頂戴した僕たちの方が危なかったのだが、こちらは何とか無事に生き残ることができた。この段階で、僕は自分達の幸運を疑うのをやめていた。

なんとという奇跡だろう。討伐不可能とさえいわれていた五匹の魔王のうち、四匹がこの世からいなくなった。人類の驚異は去ったと言ってもいいだろう。このまま中央の魔王が現れても、先生と謎の協力者がいれば、問題なく勝利を収めることができるだろう。

僕達がサプレサーになる必要なんかない。どう訓練を積んだって、

先生達のような異常な実力になどなりっこない。そう僕達に確信させるだけの、圧倒的な壁を感じた。この二人を前にすれば、セレナの才能など取るに足らないものに思えてきた。

この戦いで、僕は命を失わずに済んだ。むしろ失ったのは、サプレサーとしての自信だろう。

僕でさえこれほどまでの自信喪失を感じていたのだ。まして普段から自信たっぷりのセレナが受けたショックはどれほどだろう……。そう思っただけでセレナを見れば、彼女は涙を流していた。うれし涙を。

「勝った。生きてるよ……ラルク」

「そ、そうだね……」

ショックを受けていたのは僕だけだった。セレナはむやみやたらな自信家では無かったのかも知れない。普段は、自信たっぷりにふるまってはいたが、その実、自分の実力をしっかりと分かっていたのかも知れない。

その点、僕はなんだったのだろう。僕が一番傲慢だったのかも知れない……。そんな負の連鎖が僕の心を満たしていた。本来ならどれほど喜べる状況か。身に余る幸運。およそ人が一生のうちにえるであろう幸運を、この日一日だけで全て体験したというくらいに幸運が続いたのだから。

実際、この時すでに僕は一生分の幸運を使い果たしたのかも知れない。

十八話（後書き）

次か次の次辺りで完結予定

最終話（前書き）

やっぱり先週は更新できませんでした………すんません

最終話

「……………クククククク……………」

突然怪しい笑いを始めたのは、先生とともに戦った謎の助っ人だった。

「ご苦労だったな。ドローチン・ヴェンよ」

一瞬、誰のことか分からなかった。隣を見るとセレナも首をかしげていた。

「……………なぜ私の名前を知っている。自己紹介をした覚えはないぞ」
先生がそう言って初めて、ドローチン・ヴェンと言うのが先生の
本名だったことを思い出した。

「……………ああ、知っているとも。お前が赤子のころから、良く面倒を
見てやったではないか」

「え……………先生の昔の知り合い？」

セレナが聞いたが、先生は僕たちの方を振り返ることすらしな
かった。代わりに、再び戦いの構えを見せた。

「まあそついきり立つでない。十年ぶりの再会なのだ。積もる話も
あろう」

「……………十年以上昔に知り合った友などいない」

「まあ、そうだろうな、ドローチンよ。そなたはあくまで我が子の
ようなものであった」

「……………誰だ。お前は」

先生が身にまとう魔力を一層強めて問うた。

「まさか忘れたわけではないだろう。この私、中央の魔王たるリュ
ーファク・デ・ラミサールを！」

「な……………」

僕とセレナはそろって絶句してしまった。（この時グールアルは
意識を失って倒れていた）

なぜ中央の魔王が他の魔王を倒すために僕たちと共闘していたの

か。なぜ、魔王と先生が十年来の知り合いなのか、なぜ……………。

答えの出ない問いが僕たちの頭の中で渦巻き始めた。おそらくこれらの問いの答えは間もなく与えられるのだろう。しかし、教えられて初めて知ったのでは、致命的に遅すぎるのだろうかという確信があった。しかし、解答のヒントは与えられていなかった。……………僕達に答えを見出すすべはなかった。

僕達が時間を見出す間にも、先生は行動を起こしていた。真横にいた魔王に向かって神速の抜刀術。あんな武器何所にかくしていたのだろうか。

しかし先生の斬撃が切り裂いたのは、魔王の残像のみ。僕たちの頭上に現れた本物は、余裕の表情で、僕達を一瞥。

「無駄だ。ドローチン。今のお前如きでは、私に勝つことはできない」

「黙れっ」

珍しく大声を発した先生は、すぐさま呪文を唱えて飛び上がり、魔王に尚も追撃を加えた。

「はっはっは。当たらんぞ。その程度の速度では」

対するに魔王は、先生の視認困難な連続攻撃をことも無げにかわしていった。

「勝てない……………」

セレナが絶望の呻きを上げた。僕も同感。万全な状態の先生ならともかく、この時の先生は、魔王達との連戦で、激しく力を消耗していた。

「ひとついいことを教えてやろう」

先生の猛撃をかわしながら、軽く片手を一振りした魔王は、その手より強力な闇の魔法を放ち、先生を地に落とした。

「私がお前たちを援護した理由はな……………」

こう前置きして、魔王は僕達を陰ながら援護していたことを暴露した。道理で何もかもがうまくいきすぎるわけだ。

「……………私は気がついたのだ。お前達人間どもが我々を全滅すること

が不可能なように、我々魔王もまた、人類を全滅することはできないと。私はこの世に生を受けて以来、ずっと人類の全滅を目指してきた。今までの魔王がなしえなかった、魔獣を作るといふ奇跡の術式を発見し、それを応用して魔王を作り出すことまでも成功させた。この時代にこれほど多くの魔王が生まれたのは、私の努力のたまものなのだよ」

「そんな……………」

僕は思わず呟いてしまった。魔王が作爲的に魔王を生み出せるなど、人類にとつてはとてつもない驚異だ。と言うかそれだけでも人類を全滅させられるのではないだろうか？

「しかし、この方法は、時間がかかる。一体の魔王を生み出すのに、二年もの歳月を要し、その間一切の魔獣を生み出すことができなかった。魔獣を生み出すためには、魂と対をなすもの——私はこれを還魂カエリタマと呼んでいるが……が必要だからだ。知っていたか？世の中の魔獣は、お前達が生を受けるときに、その身の内に魂を宿すために、同時にその還魂を生み出しているのだ。その還魂が集まると、魔獣が世界に現れていたのだ。そしてわたしはこれを狙ったところに狙った量だけ集める事ができた。ただそれだけのことで、私は好きな魔獣を私の手元に生み出すことができたのだ。と、話がそれってしまったな。とにかくだ、この方法で無数の魔王を生み出したところで、この広い世界の隅々まで、隈なく人類を探し出して、その命を絶つことは難しい。何人魔王がいてもだ。それはこの十年で嫌というほど分かった。そなたたち人間はゴキブリの如くしぶとい」

僕たちは余りの話に啞然として聞き入っていた。先生ですら、攻撃するのを忘れていたようだった。

「しかし、私はあきらめる気にはならなかった。人類の全滅は、我々魔獣の夢なのだ。——おそらくこれはこの魂と還魂の相性が良くないことが原因なのだろうが——、私はそこで一つの方法を見つけた。徹底的に人類を消すための一つの方法。それは魔王の数では解決できない。量の多さでは解決できない問題なのだ。それ

なら、どうするか。答えは一つしかない。質を上げるのだ。たったひとつだけでいい。誰も想像できないような、圧倒的な実力があれば、或いはこの星もろとも、人が住めない環境にすることも可能ではないだろうか？二年あれば魔王を作ることができた。私の計算では、そのおよそ二百倍の量の還魂があれば、何かが生まれる。圧倒的な実力を持った何かが」

「……だからか。だから、人がたくさん生まれるように、人を殺す他の魔王を殺したのか。僕達を使って」

ここにきてようやく僕は答えにいたった。そしていずれにせよ、手遅れなのだと悟った。僕達に話すということは、既に僕達がどうしようと、この魔王の計画には影響を及ぼさないのだろう。おそらく、その強大な何者かを生み出すための魔法は、既に発動している。東西南北の魔王が消えた今、その魔法は貪欲に還魂をかき集め、いずれ人類にとって致命的な存在を生み出すのだろう。

「そういうことだ。すでに私の魔法は発動している。そしてお前たちにそれを止めるすべはない。たとえ私を殺しても、な。お前たちにこのことを教えたのは、他でもない。お前たちこそが、私の計画の最大の協力者だからだ。協力者に計画の内容を教えてやらない道理はないからな。特にドローチンには大分助けられた。魔王を生み出す実験をしている過程で生まれた失敗作で合ったにも関わらず、最終的には成功作以上の働きをしてくれたのだから。感謝しようじゃないか」

「く……………」

流石の先生も、悔しくて言葉も出ないようだった。まさか僕達が利用されていただけだとは。

「そういうわけだ。私はそなたたちに答えを教えると言う義理も果たしたことだし、そろそろ話を聞くのも疲れただろう。全てを知ったそなたたちには、まあ、念のため、死んでもらうことにしようではないか」

直後、僕達の周りに、闇の魔法の津波が生じた。僕たちを一気に

飲み込んで殺す気らしい。

頼みの綱の先生は、余りのショックに、顔をあげてすらいない。

……………終わった。

僕達を波が呑み込もうとしたまさにその瞬間、先生が何か一言だけ呟いた。それは封印の魔法。魔王を封じるつもりだろうか、しかし、今の先生では、封印を成功させるだけの魔力は残していないだろう。相手が強大なら、封印はそれだけ難しくなるのだ。

僕の憶測は、百八十度間違っていた。

先生が封印したのは、僕達。より正確には、僕とセレナ。意識を失っている人間に封印はかけられない。しかし、ひ弱な僕達になら……………、先生なら朝飯前だったのだろう。

——以来、僕達はずっと、何所とも分らないこの石室に封印されていた。

——時も分からぬまま——

最終話（後書き）

これで完結。

出来れば近いうちにエピソードを書いてしっかり話を終わらせます。
のでまだ未完ということにしておきます。

エピソード

——薄暗い石室を沈黙が支配する。

長い時間が流れた後、魔法使いの女が声を発した。

「でも、でも未だに私達人間は生きているわよ」

「だが、たしかに地上を徘徊する魔獣の数が以前より減ったという話はあるな。確かその昔は、今よりはるかに多くの魔獣が闊歩していたという……」

剣士の男が呟いた。

「つまり、その還魂^{カエリタマ}を集めているために、魔獣が減っていると……、そういうことかしらね……」

魔法使いの女は納得したように呟いた。

「そう……、となるとその術は、今尚働き続けているということかもしれないわね……」

セレナの呟きが、暗い石室に虚しく木霊した。

「しかしなぜ、その先生はあなた達をこんなところに閉じ込めるような事をした？普通に転移魔法を唱えれば良かったではないか」

弓使いの男が言った。

それに対し、ラルクが答える。

「あくまで予想でしかないのだけれど、先生は、その『強力な何か』が生まれ出た時に、それでも尚見つからないような場所に僕達を隠そうとしたんだと思う。人類の絶滅を防ぐために……」

「……………」

暗い石室を、沈黙が支配する。

いつ世界が滅ぶかも知れない恐怖。それは冒険者たちの心に暗い影を落とし、蝕んでゆく。

そんな雰囲気を扶植するように、セレナが言った。

「まあ、そんなことは気にしても仕方ないわ。いずれにせよ世界の終わりはいつか来るのよ。ならば今を精一杯生きればいいじゃないだから……………」

石化を解いてくれと頼んだ。最早、自分達が待つ必要はないと。世界が在るうちに、精いっぱい楽しみたいと。

救われなかった世界は、しかしいいまだ動いている。それでいいのだと。

エピソード（後書き）

なぜか仏教的な思想が混ざっている気がします……
別に宗教モノではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0530j/>

永遠の戦い《Eternal War》

2010年10月8日12時41分発行